city & life

都市のしくみとくらし

no.132

Aug.-Nov.2021

特集 まちとつながる「エリアブックレット」

city&life no.132 Aug.-Nov.2021

巻頭言

「日常」を愉しむ小さなメディア

本や雑誌など、紙のメディアがインターネット上や電子書籍へと移行している一方、独自の「紙」の文化が発展しているという。その一つがフリーペーパーやフリーマガジンだ。企業が自社PR向けに発行するもの、個人が情報発信するもの、自治体やまちづくり団体が地域情報を発信するものなど、そのタイプはさまざまだ。

同様に、有料であっても地域に根差した出版社やNPO、あるいは市民有志らによって制作されているタウン情報誌も、大手出版社が発行する情報誌とは異なり、地域のきめ細かな情報を拾い、かつ、つくり手の思いがダイレクトに伝わる地域メディアとして人気を集めている。

こうした小冊子は、タウン誌、ミニコミ誌、リトルプレス、ZINE（個人の趣味でつくる雑誌。Magazine、Fanzineに由来）など、さまざまな呼び方をされているが、ここでは「エリアブックレット」と総称した。地域メディアとしてのエリアブックレットが、町の魅力創出にどのような役割を果たしているのか、研究、あるいは実践する方々にお話をうかがうと共に、各地域で魅力的な小冊子をつくる方々に、わが雑誌、わが町の魅力を存分に伝えてもらう。（編集部）

表紙・裏表紙――「谷根千」の町並み
（関連記事:p2）
photo:坂本政十賜

特集　まちとつながる「エリアブックレット」

contents

対談 | エリアブックレット（地域雑誌）がつなぐもの
『谷根千』が見てきた町｜森まゆみ×陣内秀信　2

インタビュー | 地域メディアでつくられる「まち・くらし」　8
1.地域メディアが果たしてきたこと、その可能性｜加藤晴明
2.自立性をもって、地域とゆるやかにつながるためのコミュニティメディア｜影山裕樹

ケーススタディ―① | 地域を変えるエリアブックレット・ネットワーク　14
1.**兵庫県豊岡市／NPO法人本と温泉**
城崎温泉でしか買えない、「地産地読」をめざす本と温泉プロジェクト
2.**神奈川県足柄下郡真鶴町／真鶴出版** 出版と宿で真鶴の魅力を発信する

ケーススタディ―② | まちの魅力、徹底的に伝えます！　20
1.盛岡の、飾らない「ふだん」を伝える『**てくり**』
2.熟年世代のコミュニケーションツール『**みやぎシルバーネット**』
3.「右京びと」こそが地域の宝物『**右京じかん**』
4.萩の「キュン」とした魅力を伝える『**つぎはぎ**』
5.島々をわたる瀬戸内の風を全国へ『**せとうちスタイル**』

連載 | Let's Greening!　緑のまちづくり⑩ |
匠の庭師が日本庭園文化を世界に発信
港区芝公園　30

連載 | 子どもたちの「笑顔」に会いに行く㉓ | 鳩ヶ谷キッズランド
ふわっと夢空間「陽彩（ひいろ）ブリッジ」　32

連載 | 噂の「駅前」探検⑩ | 桜木町駅　今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜　34

back number・information　38

対談

エリアブックレット（地域雑誌）がつなぐもの

『谷根千』が見てきた町

1984年10月に創刊、2009年8月に94号をもって終刊となった地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（通称:谷根千）。編集人は、当時、子育て真っ最中だった地元の主婦3人。森まゆみさん、山崎範子さん、仰木ひろみさんだ。元祖・地域雑誌ともいうべきこの雑誌が目指したものと、果たしてきた役割は何だったのか。都市史の研究者であり、弊誌企画委員でもある陣内秀信氏を聞き手として、『谷中・根津・千駄木』編集人の一人であった作家・森まゆみさんにお話をうかがいながら、地域雑誌の歴史と現状、今後の可能性を俯瞰する。

photo:坂本政十賜

森まゆみ
作家、編集者

×

陣内秀信
法政大学特任教授／本誌企画委員

女性目線で捉える地域雑誌の誕生

森――地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（以後、『谷根千』）を創刊する前、陣内さんにご相談したこと、覚えてらっしゃいます? お会いしたのは、新宿の紀伊國屋書店の喫茶店だったと思います。

陣内―『東京のまちを読む…下谷・根岸の歴史的生活環境』という本を出した後で、それを読んでということでしたよね。

森――雑誌出すんだったらこれ読みなさいって薦められて。読んだら、これはすごいと思って、すぐに会いに行ったんですよ。1984年でした。

陣内―ということは、『谷根千』を創刊した年?

森――お会いした後すぐに出したんです。

陣内―うわっ早い!

森――無謀でしょ。その2カ月後には2号が出ましたから（笑）。その間に保存運動のパンフレットなんかもつくった。われながらエネルギッシュでしたね。

陣内―僕はあの時、知り合いの建築家を紹介したり、勉強会をやろうよ、なんてことくらいは言ったかな。

森――谷根千は生きられた都市である、とおっしゃったのを覚えています。普通の人たちが、そこで生きるのが谷根千で、権力によってつくられた町じゃないんだとおっしゃった。いい言葉だなと感激しました。

陣内―当時、批評家の多木浩二さんが『生きられた家』を出して、それが下地にあったんだと思います。ちょうどこの頃下谷や根岸を調べていて、今でこそビルが立ち並ぶ町になっているけれど、よく見ると江戸時代の町割がいまだに残っている。その意味で東京は生きられた空間だと言ったんですが、谷中や根津、千駄木もまったく同じだと思った。

森――それと、せっかく女性たちでつくるんだからお産や育児や家事について聞き書きしたらいいんじゃないかともおっしゃった。男がつくるとどうしても間取りや設計の話が中心になるから、それとは違う角度から町を見直してみるのも面白いんじゃないかって。

陣内―それで、研究会も始まった。

森――「谷中・根津・千駄木の生活を記録する会」を、創刊してすぐに立ち上げました。東大に来ていた藤原惠洋さんが協力してくれて、陣内先生にも参加してもらいました。

陣内―建築系の若い人たちも参加してくれて。その後まちづくりNPO・谷中学校を始めた手嶋尚人さん（初音すまい研究所代表・建築家）や法政の僕の研究室出身の西河哲也さん（プランナー）、椎原晶子さん（NPOたいとう歴史都市研究所副理事長・環境デザイナー）たちと連携して進めていくことになるんですが、森さんが耕してくれたからできたことです。

森――トヨタ財団の助成金を得るためにつくったグループ「上野・谷根千研究会」でも路地の研究とか谷中で残したいものは何かなんていうアンケートをとったりしました。

陣内―不忍池に地下駐車場がつくられそうになった時反対運動に立ち上がったのは『谷根千』の特集がきっかけ?

森――結局、計画は白紙になりました。私たち、乱開発の計画潰すの得意なんです（笑）。

陣内―やはり、自分を育ててくれた土地に対する愛着でしょうか。

森――いや、逆で、嫌いだったんですよ、ここが。

陣内―えっ、そうなの?

森――子どもを産んで変わりましたね。

陣内―やっぱりそうか。

森――小さな赤ん坊とか連れて歩くでしょ。すごくゆっくり歩くわけです。そうすると、まわりの景色がよく見えてきて、あれっ、ここって意外に面白いって思うようになったんです。天水桶とかコンクリートのゴミ箱とか木の電柱とかも残っている。まあ、私が20代の頃ですから、40年以上前の話ですけどね。そんなのがまだたくさん残っていたんです。それですごく興味が湧いてきて、調べ始めたんですが、先行研究がまったくない。銀座とか新宿とかのいわゆる盛り場の研究というのはありましたが、私が知りたいのはこの場所。ないならないで、自分たちで調べればいいかと、雑誌を始めたわけです。

陣内―論文にするとかではなくて、雑誌を出そうと思ったのはなぜ?

森――小説でもよかったし写真集にするという案も浮かんだんですが、いずれにしても自分ひとりでやっても意味ないし、この町に住んでいるみんなにも伝えなきゃダメだと思ったんで、だったら雑誌かなと。

陣内―それにしても「谷根千」という

森まゆみ
もり・まゆみ―1954年東京（文京区動坂）生まれ。作家、編集者。1984年、仲間と地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（通称：谷根千）を創刊。著書に、『谷根千のイロハ」』（亜紀書房、2020）、『「青鞜」の冒険』（集英社文庫、2017）、『「谷根千」の冒険』（ちくま文庫、2002、初版原題『小さな雑誌で町づくり』晶文社、1991）他多数。

陣内秀信
じんない・ひでのぶ―1947年福岡生まれ。法政大学特任教授、建築史家。工学博士。著書に、『水都 東京…地形と歴史で読みとく下町・山手・郊外』（ちくま新書、2020）、『イタリア都市の空間人類学』（弦書房、2015）、『東京の空間人類学』（ちくま学芸文庫、1992）他多数。

ネーミングが絶妙。タイトル名としてだけじゃなくて、コンセプトが抜群にいい。谷中、根津、千駄木を一緒の地域として括ってしまうという発想が画期的でした。

森――行政区を股にかけてますからね。でも、たまたまそうなったんです。私が団子坂の下に住んでいて保育園もうちのそばにあった。で、そこを中心に円を描いたら、谷中も根津も千駄木もそのなかに入っちゃった。でも、いろいろ言われましたよ。ある時千駄木で奥さんにつかまっちゃって、「うちはお屋敷町なんだから、下町の長屋と一緒にされちゃ困るわ」って言われた（笑）。やっぱり高台に住んでいる人と谷底に住んでいる人は違うんだなって思いましたよ。でも、谷底に住んでいる人は、山手のことを「の手」とか言って、羨ましいと思いつつも、半ばばかにしているようなところもあって、一筋縄ではいきません。

陣内―単純な対立関係じゃないんだ。

森――東京って、そういうところが面白い。

陣内―東京は、地形そのものが凸凹でしょ。凸凹がいっぱいある。その凸の部分がお屋敷=住宅で、反対に、凹のところは町人地。谷根千でいうと、谷の奥まったところにちょうどいい具合に根津神社があって、面白い小宇宙ができています。上と下がお互いに意識し合い、助け合っているわけですが、谷根千という言葉は、それをうまく切り取っている。さすがだなって思いました。谷根千って今や誰もが知ってる共通語です。

森――うれしいことに。地域雑誌『谷中・根津・千駄木』じゃ長過ぎますものね。みなさんめんどくさいもんだから、勝手に「谷根千」って呼ぶようになった。私自身気に入って、事務所名を谷根千工房にしちゃったくらいです（笑）。

陣内―80年代は谷根千といえば雑誌のことだったんですが、今は雑誌の存在は知らなくても、全国どこに行っても谷根千で通ります。観光ガイドにも「谷根千」と書いてありますからね。

身近にある情報こそ本当の情報

陣内―創刊当初から注目されましたよね。

森――手前味噌で恐縮ですが、確かに反響はすごかった。創刊してすぐに大きく取り上げてもらって。新聞記事もずいぶん出ました。みんなで、この辺りは事件がなさすぎなのよ、なんて言ったりして。

陣内―それは冗談だとしても、本当に面白かった。当時、日本は情報化社会だってものすごく喧しかった。猫も杓子も情報、情報でしたから。でも、そこで言う情報って何だろうって思っていました。マスメディアが取り上げる情報はもちろん情報には違いないけれど、僕たちが必要としている情報は、果たしてそういう情報なんだろうか。ちょっと違うんじゃないかっていう疑問がずっとあったわけです。そんななかに突然『谷根千』があらわれた。びっくりしましたよ。こういう情報こそ、僕たちが探し求めていた情報だと、本気で思いましたね。とくに僕は都市や地域のことを研究していましたから。

森――いわゆる一般雑誌に載っているような情報は一切やめて、オリジナルな情報だけ載せようと決めました。

陣内―地域に眠っている情報を掘り起こし、どんどん情報化していきましたよね。地域を深掘りして、忘れかけていた記憶を次々によみがえらせる。これまで情報と呼んでいたものは、縦のものを横にしたり、右にあるものを左に移動させたり、要するにものごとを並べ替えることが情報化だと思い込んでいたわけですが、そうではなくて、自分たちで掘り起こしていくこと。掘り起こすという作業こそが、じつはとても面白いことなんだということを教えてくれたんです。地域雑誌というかたちでね。

森――だって、タレントの恋愛話なんかより、隣のおばあちゃんの恋話（こいばな）の方がわくわくするし、近所のおじいちゃんの来し方行く末を聞いている方がずっと面白い。

陣内―それは、本物の情報だからですよ。情報が生きているんです。

森――近所のおじいちゃんのことは知っていても、昔のことまでは知らない。だから、『谷根千』が出た次の日は、老人会で話題になって、けっこう盛り上がったよ、なんて言ってました。

陣内―それが、地域雑誌の醍醐味かもしれない。身近にある情報こそが、本来の意味での自分たちの情報ですからね。

文化の深いところを掘り起こす

陣内―僕は創刊号からもっていますが、何号まで出たんでしたっけ?

森――2009年発行の94号が終刊。25年続きました。3カ月に1回の季刊発行だったので、正直けっこう大変でした。

陣内―しかも特集主義。25年間に特集テーマを100本近く立てたわけでしょ、それだけでもすごい。

森――やりたいことが次々に出てきて、あと倍くらいはできたと思っています。毎号連載記事だけでいくという方法もあったと思いますが、連載だけだと読み捨てられちゃうような気がして。どうしたら、捨てられずに済むかなとか考えた末、特集スタイルにいきついた。毎回新しい特集を組んで、テーマを徹底的に掘り下げる。これ一冊読めばすべてがわかる! 的な特集です。銭湯を皮切りに酒屋さんとか、お米屋さん、和菓子屋さん、本屋さんとか、いわゆる生業（なりわい）もので特集を組みました。

陣内―特集主義だけど、いくつかの柱はありましたよね。

森――今言った生業ものが一つ、もう一つはみんなが共有している記憶、私はランドマークと名付けたんですが、たとえば、不忍池とか団子坂とか藍染川とかみんなが知っている場所を特集しました。そしてもう一つ、文学や美術にかかわった人の特集もやりました。谷根千やその周辺には、誰もが知っている作家や芸術家がかなり住んでいました。森鷗外、夏目漱石、樋口一葉、高村光太郎、宮本百合子とか、みんなこの辺で暮らしていた人たちです。ただし、普通の伝記じゃつまらないので、森鷗外や夏目漱石から地域を読み解くといった切り口で……。たとえば鷗外には、「団子坂」という小説があります。すごく短いもので、ほとんど知られていませんが、実際に鷗外に会った人や見たことのある人の証言などと一緒に紹介しました。鷗外は、大正11（1922）年に亡くなっているので、今、こういう特集を組むのはムリでしょうけど。

陣内―そばに東大や藝大があるので、文化人が多かったんですね。ところで、『東京人』は『谷根千』に触発されて生まれた雑誌だって知ってましたか。

森――えっ、そうなんですか?

陣内―編集長をしていた粕谷一希さんにうかがったことがあるんですが、ニューヨークには『ニューヨーカー』という素敵な雑誌があって、それに憧れて『東京人』をつくったと言ってました。『東京人』も特集主義でしょ。『東京人』よりずっと先行して特集主義でやってきたのは『谷根千』ですから、影響されてないわけはないと思います。

森――私たちは身銭を切ってつくっているのに、あっちは東京都というでっかい後ろ盾がある。羨ましいなって思っていました。

陣内―『東京人』は月刊で、今も新しいテーマを次々に打ち出して、よくネタが尽きないなと感心してますが、『谷根千』は、谷中・根岸・千駄木というもっと狭い地域を対象にしていたわけですから、本当に驚きます。

森――『谷根千』が創刊した84年くらいから、江戸・東京ブームが来ました。陣内さんを筆頭に、藤森照信さん、鈴木博之さん、松山巖さん、田中優子さんらが活躍し始める頃ですが、なかでも陣内さんの『東京の空間人類学』が出版されて、あれは画期的でした。湯島天神や神田明神、諏訪神社とか根津神社が都市のエッジ（縁）につくられていたという。それからですよ、門前の小僧みたいな感じで、建築を猛勉強して。その結果保存活動家になってしまい今に至るわけです（笑）。

陣内―日本の都市は、ヨーロッパやアメリカと比べて古い建物や歴史的な景観があまり残っていないという印象があります。しかし、そこに込められた記憶や場所の特徴、あるいは生活スタ

イルや自然と人間関係に注目すると、受け継がれているモノやコトは、けっこうあるんですよ。最近よく耳にするインタンジブル(intangibles)なもの、すなわち無形資産とかいわれるものですが、じつはむちゃくちゃ受け継がれているんです。いわゆる都市や地域がそれなんですが、『谷根千』は、まさにそこに注目してきたわけですよ。「記憶を記録する」ということを創刊当初からコンセプトにしていましたよね。僕たちが始めた法政大学の江戸東京研究センターも、じつはそれがテーマ。人はなぜ記録を調べ書き残すのか。なぜ過去のものを伝承し、語り継ごうとするのか。地域だけではないけれど、文化の深いところを掘り起こす作業はとても重要です。

日本人の暮らしが見える

森――『谷根千』の関係で、アメリカの大学4校に講演に行ったことがあるんです。そうしたらなんとみんな『谷根千』を知っているんですよ。これには驚きました。もっとも、海外の大学とはけっこう交流があって、大学図書館にはかなり入ってたことは知っていましたし、当然読者もいるとは思っていましたけど。

陣内―それはそうでしょう。アメリカには、絶対にないタイプの雑誌です。『谷根千』の大きな特徴の一つに、聞き書きがあります。取材をしながらまとめていくというプロセスが重要なんですが、それが取材相手と信頼関係をつくり出していく。欧米だと、そういうプロセス自体が成り立たないんじゃないか。たとえば、建築の調査でイタリアなんかに行くでしょ、僕らは平気で家のなかに入っちゃいますが、彼らはそれができないみたいです。階級差もあるんでしょうが、取材が可能になる程度に信頼関係を築くことから始めないと物事が進んでいかないようです。とくに、その場所に暮らす人々の日常に深く入り込み、その記憶や歴史を掘り起こすわけですから、信頼関係がなければ、絶対にできない作業です。『谷根千』を読むと、新聞記事とは違いますが、取材する側とされる側の関係性がうまい具合にバランスが取れているように思います。民俗学や社会学の調査なんかに近いのかもしれない。それを実際の「生きられる空間」を相手にやってきたわけですから。そりゃ欧米人は驚きますよ。しかも、25年間続けてきた。

森――普通の日本人の暮らし方がよくわかるものって、案外少なかったのかもしれません。『谷根千』には、そんな記事ばかり載せていましたから。うちの前の事務所には、いつもフリーサイズの喪服がかかっていたんですよ。ある時新聞記者の方に、「これ、何ですか?」と聞かれたんで、お世話になったり話をうかがった方が亡くなった時、すぐ葬式に行けるようにって答えたんです。香典代わりにその方が載った『谷根千』を30冊くらい持って行き、「会葬者にお渡しください」と渡していました。

陣内―それは、いい話ですね。

森――取材といっても私たちの場合、その人のライフヒストリーをまるごと聞くわけで、普通のメディアではやらないことです。そういうところが、『谷根千』の面白いところだったのかもしれません。お葬式にはずいぶん行きましたよ。私の撮った写真が遺影に使われたり、故人の家族の方に取材テープを渡したりということもありましたね。でも、もうずいぶんたくさんの方があっちへ逝っちゃいました。

陣内―考えてみたら、すごい地域貢献ですね。「谷根千」に暮らす人々の人生に付き合ったわけですからね。『谷根千』は休刊しましたが、谷根千ネットとしてウェブ上で情報発信を続けています。今後、若い世代が引き受けて続けていかれると思いますが、事業継承と新たな発展というという面ではどんなヴィジョン・感想をもっておられますか。

森――それが難しいところで、結局、「記憶を記録に換える」という『谷根千』の根本のところは次の世代には継承されなかった、残念ですけどね。その点では、老体に鞭を打ちながらも、私たちがやり続けなければいけないんだろうなとは思っています。ただ、子どもたちの世代は、編集には興味はないけれど、モノづくりには関心があるようで、文化財保存の大工になったり、手づくりのお菓子づくりに励んだり、面白そうなことをやり始めています。そもそもうちの名前が「谷根千工房」ですからね、手を動かす方が面白いのでしょう。一応出版社として登記してあるんですが、今度定款を変更して、いろんな事業を展開できるようにしようと思っています。応援よろしくお願いします。

陣内―これまであまり聞けなかった話がたくさん聞けてよかったです。これからも、いろいろな活動を期待しています。

対談を行った『谷根千』の資料庫「記憶の蔵」（背後の建物）に隣接する文京区千駄木公園にて

『ベスト・オブ・谷根千 町のアーカイブス』
谷根千工房編著（亜紀書房、2009）
地域雑誌『谷根千』のアンソロジー。表紙には、『谷根千』の各バックナンバーの表紙がデザインされている。中ページには、特集の復刻版も

インタビュー

地域メディアでつくられる「まち・くらし」

まちやくらしにとって、地域メディアはどのような役割を果たし、どのような可能性をもつのか。メディア社会学が専門の加藤晴明さんと、全国の地域メディアのつくり手をつなぐウェブサイトを主宰する影山裕樹さんに、地域メディアの現在と未来を語っていただく。

INTREVIEW——①

地域メディアが果たしてきたこと、その可能性

加藤晴明 中京大学現代社会学部教授

構成:**村田保子**

地域メディアの役割は「自文化の自分化」

地域メディアが、地域のことを語り、地域の人が「地域の自文化」に誇りをもち、地域への肯定感を形成すること。これができているかどうかが、地域メディアの役割を語るうえで重要な論点です。この考えの前提には、「構築主義」や「物語論」という視点があります。「物語論」は、あらゆる事象は物語を語る過程でリアリティが構成されると考えます。つまり地域はあらかじめあるのではなく、語ることで定義され、私たちはそうした語りにリアリティを感じていくのです。これは個人も同じで「自己物語」という発想があります。自己というものは、それ自体は見えない存在ですが、自己について語ることで自己としてかたちづくられるという考え方です。インターネットを活用し、私たちが絶え間なく自己を発信しているのも、自己をかたちづくる行為。ブログやSNSは、自己を物語るための文化装置なのです。

私はこの「自己物語」という考え方を、地域メディアに応用して理解しています。つまり、地域メディアは、地域の自己物語の文化装置だということです。地域は、物語られることで「地域」になる。そして、そこに住んでいる人たちが、地域メディアを通して、自分の地域の再発見や再評価をしていく。自分がそこに暮らし、錨を下ろして生きていく場所、アイデンティティを付与するにふさわしい場所かを見定めます。地域メディアは、そうした地域と私たちのアイデンティティ形成を媒介する装置でもあるのです。これを地域メディア研究では「自文化の自分化」と呼びますが、そうした対話を自然なかたちで促す装置となること。それが地域メディアの役割だと考えています。

普通の人が地域を語る面白さ

日本の地域メディア論を切り拓いてきたパイオニアである田村紀雄先生は、メディアの類型を「コミュニケーション・メディア」「スペース・メディア」、地域の類型を「地理範域をともなった社会的単位」「機能的共通性にもとづく社会的単位」の四つに分けて考えました。さらに2007年、コミュニティFM、地域ポータルサイト、ホームページ、ブログ・SNSなどの新たなメディアを追加してまとめたものが、現在も基本になっています(p10、表参照)。2010年代以降はYouTuberやブロガーを含む地方で活躍しているインフルエンサーなど、個人によるインターネットを利用した配信が、地域と地域外の人をつなぐビジネスとしても成長してきました。ブログ・SNSは、むしろ個人という社会的単位と分類するべきかもしれません。地域メディアと一言でいっても、かたちのあるものからないものまで、さまざまな形態があるというのが、研究分野における考え方です。

私自身は、インターネット社会における個人のメディア表現に関心があり、コミュニティFMを中心に研究し、現在は奄美大島から与論島まで有人8島、無人6島からなる奄美群島のメディアと文化に焦点をあてた研究をしています。地域メディアとしてのコミュニティFMに注目している理由は、さまざまな立場の人が登場し、語ることができる身軽さと声メディアの機動力です。文章を書くことは難しくても、話すことができる人はたくさんいて、小学生から100歳の人まで、上手く引き出せば、掛け合いのなかで、それぞれの立場からいろいろなことを自由に話します。私が感じている地域メディアの面白さは、コミュニティFMに見られるような、プロフェッショナルではない人がメディアで地域を表現しているのびやかな景観にあります。元バスガイドや化粧品販売員など、約100名のコミュニティFMのパーソナリティにライフストーリーを聞いたのですが、多くの方が「生涯ラジオで話し続けたい」と語りました。コミュニティFMは国から許可された公式の放送局であり、パーソナリティの方は地域の代表者であるという当事者意識がとても高い。かかわる人全員が「自分の放送局」だという主人公感覚をもっているところが魅力です。

私の研究分野である奄美の例でいえば、コミュニティFMである「あまみエフエム」は、あらゆる番組が地域のことを語っています。話す言葉も島口と呼ばれる奄美の方言が多く使われ、流す音楽もすべて奄美発の島唄や歌謡曲・ポップスです。歴史や文化についてもさまざまな分野の研究者や当事者が語り、放送局全体で奄美の文化世界を発信し続けています。ラジオで話す人が島口を使い続けることで、奄美の子どもたちも自然に島口を使うようになっているのです。また、奄美で生み出される歌は、大好きな故郷のことを歌ったアイデンティティ・ソングが多く、あまみエフエムが日々そういった放送を流すことで、島の人たちは文化や歴史を学び、自分たちが住む地域に対する自尊心を育んでいくのだと考えています。

コミュニティFMだけに限らず、地域メディアにかかわる人たちの当事者意識の高さは、地域メディア全体に言えることです。しかし、個人単位の発信については、必ずしも地域メディアとしての役割を担っているとはいえません。私はインターネット研究の第一世代で、パソコン通信の時代から、個人の発信を定点観測し、SNSの調査などもしていますが、自由過ぎるがゆえの歯止めのなさがあり、地域をテーマにしていても、語っているのは地域ではなく自己にとどまっていると考えています。有名YouTuberが個人と

加藤晴明
かとう・はるひろ—社会学者、中京大学教授。1952年新潟生まれ。1976年法政大学法学部政治学科卒業、86年同大学院社会学専攻博士後期課程満期退学。1985年中京大学教養部専任講師、86年社会学部専任講師、90年助教授、2004年教授、現代社会学部教授。専門はメディア社会学。主な著書に『奄美文化の近現代史　生成・発展の地域メディア学』(共著、南方新社、2017)、『自己メディアの社会学』(リベルタ出版、2012)、『メディア文化の社会学』(福村出版、2001)など。

しての名声を得て、ビジネスとして成功していても、その先で地域の人を巻き込み、集合的な経験や文化をつくっていかなければ、地域に生きる人にその場所で生きる意味を与える力にはなりません。

「ひろば」という視点でメディアを見直す

奄美にはたくさんの紙媒体があり、地域の人々の「自文化の自分化」を促す装置になっています。そのなかでも、事業を広く展開し、地域の経済に深くかかわっている『夢島』と『machi-iro（マチイロマガジン）』の2誌を紹介したいと思います。なぜなら、地域メディアが「自文化の自分化」を促す装置としての役割を担うには、持続的に地域の経済にかかわり、事業として継続していくための仕組みをデザインする力が必要だと考えているからです。

『夢島』という情報誌は、大阪からの移住者が単身で始めた事業です。奄美の観光情報を掲載していますが、掲載されている店舗で食事や買い物に使えるクーポンがついていて、地域外から奄美に来た旅行者が手に取って島を巡ることで、掲載した店舗でお金を使う仕組みが上手く機能しています。また、『夢島』は広告代理店として、広告を出す店舗に対して経営コンサルティングもします。メニューをつくったり、必要なサービス同士をつないで提携を提案したりするなど、単なる紙媒体発行以上のかかわり方をすることで地域の方々と深くコミュニケーションしています。

『machi-iro』という、奄美市名瀬地区の情報を提供しているタウン誌は、名瀬地区の中心部にあるなぜまち商店街が、「NPO法人まち色」を立ち上げて運営しています。最初は商店街の機関誌のような位置付けでしたが、現在はウェブマガジンとしても展開し、アクセスの75%は地域外からの閲覧になっています。地域と地域外の人をつなぐメディアとして成長し、地域外の企業がNPO法人の支援企業として会員になるケースも増加。発行を重ねるごとに内容も充実し、著名人のインタビューや大島紬などの地域の文化を取材したルポルタージュを始め、綿密に取材した珠玉の文章と写真が掲載されるなど、非常に高いクオリティで編集されています。

この2誌の例から言えることは、組織化、制度化、仕組み化され、継続していることがメディアとしての重要な信頼感をつくるということ。また、外部の人とのつながり、他事業への拡張などの展開も重要になってきます。それらを推進していくリソースが地域に存在することが、価値のある発信につながっていく。地域メディアは、誰が何のために、どのような仕組みでやっているのか、それが地域で社会的に支持されているのかを見極めていく必要があると考えています。

私がリサーチをしたところでは、大都市以外の地域では、ウェブ媒体だけで、地域経済にかかわるダイナミックな事業を組み立てている事業者は少なく、人とのつながりや事業の拡張なしに、インターネットの世界だけで続けていくことは難しいと結論付けています。これを乗り越えるには、田村先生が地域メディアを語るうえで大切にしてきた「ひろば」という視点が再評価されるべきかもしれません。紙媒体、あるいはラジオ局のような「場」でもかまいませんが、地域メディアは実体を伴いながら、それを求心力として地域の人たちとリアルにかかわり、地域の人同士や地域と地域外の人をつないでいく必要があります。紙媒体や「場」という実体を伴うメディアが、インターネットを利用して外の世界へと拡張し、再び実体を伴うメディアに還流していくことが理想的です。今後、地域メディアが地域を動かすためには、オンラインとオフラインが融合した「渦」をつくっていくことが求められると思います。

現在の地域メディアの類型（田村紀雄『現代地域メディア論』）
※太字が、2007年版で田村が追加したもの。

		「メディア」の類型	
		コミュニケーション・メディア	スペース・メディア
「地域」の類型	地理的範域をともなった社会的単位	自治体広報・地域ミニコミ紙	公民館・図書館
		タウン誌　・地域キャプテン	公会堂・公園
		CATV・県紙・県域放送	ひろば
		コミュニティFM	**情報センター**
		フリーペーパー	**パソコン教室**
		地域ポータルサイト	**研修施設**
		携帯電話での情報サービス	
	機能的共性にもとづく社会的単位	サークル誌	クラブ施設
		ボランティアグループ会報	同窓会館
		各種運動体機関紙	研修所
		NPO・諸団体のホームページ	
		特定地域の電子会議室	
		ブログ・SNS	

INTREVIEW——②

自立性をもって、地域とゆるやかにつながるためのコミュニティメディア

影山裕樹

構成:杉山衛

影山裕樹
かげやま・ゆうき—1982年生まれ。早稲田大学卒業後、雑誌編集部、出版社勤務を経て2010年独立。現在、合同会社千十一編集室代表。アート系書籍の企画編集と共に、「EDIT LOCAL」を始めとして、さまざまなかたちで地域プロジェクトのディレクションに携わる。著書に『ローカルメディアのつくりかた　人と地域をつなぐ編集・デザイン・流通』（学芸出版社、2016）、編著に『新しい「路上」のつくり方　実践者に聞く屋外公共空間の活用ノウハウ』（DU BOOKS、2018）、共編著に『新世代エディターズファイル越境する編集—デジタルからコミュニティ、行政まで』（BNN、2021）など。

刺激的だったローカルメディアとの出会い

僕は生まれも育ちも東京ですが、出版社勤務から独立した翌年に東日本大震災があり、それ以降増えた地方の仕事で、地方には面白い刊行物がいっぱいあることを知りました。ちょうど東京中心の出版や編集の世界に対する疑問がわいていた頃で、地方のメディアは、もっと人々の生活に現実的にかかわっている印象でした。販売先も自分で開拓するし、地方の人気店を切り盛りするようにビジネスとしても成立していて、東京を拠点とした既存のシステムで編集・出版に携わる僕らにはなかった感覚だと気付かされたのです。

2013年に、青森県の十和田市現代美術館で開催された「超訳 びじゅつの学校」という展覧会づくりに参加しました。それは市民と作家が一緒に展示をつくっていくような、ちょっと変わった、地域にとっての美術館を問い直すような展示でした。東京のメディアでも展覧会の情報は流れるのですが、そこでは市民と作家が交流するプロセスが見えてこない。東京目線では展覧会という「点」に見えることも、現実にはその土地の風土や歴史までをも含む「線」でできている。そういうことぜんぶを含めて、ここで起きていることを伝えたい。そのためにはここに暮らす人たちが、暮らしながら「線」の文脈を紡いでいく、ローカルメディアこそがふさわしい、と感じたんです。

そんな経緯があってローカルメディアに刺激をもらい、面白くなって取材するなかから、『ローカルメディアのつくりかた 人と地域をつなぐ編集・デザイン・流通』（学芸出版社、2016）という本が生まれました。『みやぎシルバーネット』や城崎温泉の本と温泉プロジェクト、『せとうち暮らし』（現・『せとうちスタイル』）など、各地のメディアに取材して紹介していますが、コンテンツの紹介ということよりも、東京のメディアづくりとは土台が違う、編集部の立ち上がり方や読者の獲得方法、取材や編集の様子など、ローカルメディアならではのつくり方を意識的に取り上げて書いた本でした。

読者との応答で立ち上がるコンテンツ

今では僕は、ローカルメディアというより「コミュニティメディア」という呼び方をするようになりましたが、コミュニティメディアには広告収入に依存しないものが比較的多くて、それがけっこう重要なことだと考えています。企業の広告に依存すると、どうしてもそこに縛られてしまう。その代わりに、販売による売り上げはもちろん、会員制、あるいはサブスクリプションなどの仕組みを一緒に立ち上げることで、収益と共に自立性を確保するような工夫をしているメディアも多い。

●影山さんが2016年に刊行し、全国の地域メディアづくりに大きな影響を与えた『ローカルメディアのつくりかた』（学芸出版社）

●地域メディアのつくり手やまちづくりの担い手を紹介する「EDIT LOCAL」ホームページ（2017年〜）

●さまざまな仕掛けでまちを編集する人たちをゆるやかにつなぐ、会員制の「EDIT LOCAL LABORATORY」ホームページ（2019年〜）

そういう仕組みは、読者と直接的な関係性をつくることにも有効です。そのつながりのなかから、メディアを自走させていく。そういう自立性と読者とのリレーションシップが地域のコミュニティメディアの魅力だし、これから重要になってくるテーマだと考えています。とにかく、何とか広告による縛りから解放されたい、と、これは僕自身の大きな課題でもあります。

というのも、僕自身は一つの場所に居続けることが苦手で、東京に拠点を置きながら地域のコミュニティメディアづくりのお手伝いをしているからです。今では地方にも都会の広告代理店などが参入して、大きな予算を使ったシティプロモーションで、地域を紹介するウェブサイトや媒体がつくられています。でもそこにはつくり手自身の内発性もないし、こだわりも希薄です。

僕の考えるローカルメディアは、やっぱり「自分がやりたい」というところから始まります。その地域で、興味のわいたコト、魅力のある人に話を聞きに行きたい、と、それだけでいい。メディアって価値観を表明するものであって、つくり手が、自分は何が好きか、どうしたいのか、という思いがちゃんと込められてないと、ダメだと思うんですね。

「ゆるくつながる」新しい地域のかたち

戦後の経済成長期以降には多くの人が都会へと移住し、隣人との関係が希薄な社会で生きるようになりました。しかし東日本大震災以降、あるいは近年の気候不順による災害が多発しているなかで、改めて地域の人たちとのつながりや助け合いの精神が重要視されるようになっています。昔の共同体の窮屈さを知らない若い世代のなかには、ムラ的な共同体に憧れて地方に移住する人も増えましたが、現実的には旧弊で閉鎖的な地域も多くて、なかなかうまくいかないこともあるようです。

であれば、これからの地域社会や地域生活には、今までのような伝統的なコミュニティとは違って、適度な距離感をもちながら、何となくお互いにゆるくつながっていく、そういうフェーズが必要だと考えています。個々にはそれぞれ独立しながらも、つながっている感じ。そういうゆるやかなつながり方のメディアとして、ローカルメディアって、すごく役立つのではないかと思います。

●千十一編集室が企画協力を行い、100を超える地域メディアが一堂に会した「地域の編集」展（日本新聞博物館、2019年）の展示風景（photo:Ryosuke Kikuchi）

たとえば福島県いわき市にUターンしてアクティビストとして活動を始め、大震災の原発事故後には海洋の汚染度を定期的にチェックしたり、その復興のあり方を論じた『新復興論』（ゲンロン叢書、2018）を刊行している小松理虔（こまつりけん）さんは、最初にウェブでローカルメディアをつくり、その取材をしていくなかで、今の仕事につながる仲間が増えていったそうです。

地方で暮らしていると、どんな人がどこにいるのか、脳内マップみたいなものができていきますよね。そういうことが重要だと思う。今なら地域の自治会に入らなくても、ウェブや紙媒体、ラジオでもいいですが、いろんなメディアを使うことでいろんなつながりをつくることができる。その点、取材をするって結構便利で、つながりをつくっていくきっかけになりやすいんですね。

『ローカルメディアのつくりかた』でも、Uターンも含めて、いわゆる「よそ者」の効用を強調しましたが、地元の人にはあたりまえすぎて、かえって見えにくい地域の良さもあります。だから地元の人とよそ者とのバランスのよい協力関係は、非常に重要だと考えています。実際、地域のコミュニティメディアを編集している人たちには、IターンやUターンでそこに住むようになった人も多いようです。

小さな生態系をつなぐウェブサイト「EDIT LOCAL」

『ローカルメディアのつくりかた』で紹介しきれなかった、地域のコミュニティメディアやそのつくり手たちを紹介するメディアとして、僕は2017年に、ウェブの「EDIT LOCAL」をスタートさせました。と同時に、いろんな方法で「まちを編集する」出版社、「千十一（せんといち）編集室」を設立しています。千十一では京都を始めとする全国各地で、地域のコミュニティメディアづくりをとおして地域の文脈を掘り起こすワークショップなども開催しています。

また2019年からは、地域のコミュニティメディアのつくり手たちが交流する場となる、会員制のサイト「EDIT LOCAL LABORATORY」を始めました。ゆくゆくは「まちを編集する」人たちが集う学会のような組織にしたいと考えていて、分科会のように参加者自身が企画するラボが立ち上がったり、月に1度、オンラインでみんなが集まって、お互いにアドバイスしながら、自分たちのメディアを工夫していく研究会を行ったりしています。

地域のコミュニティメディアのつくり手たちは、前例がないところで、それぞれ自分で工夫しながら独自の方法を編み出してきました。それはすごいことです。地域やコミュニティには閉鎖的なところがあって、それは時に排他的で窮屈であるかもしれないけれど、それゆえに「そこにしかない独自性」も生まれています。グローバリゼーションが進む今日では、地球全体が一つの均質な都市空間を目指しているようでもありますが、ある種の限定性や、閉鎖性ゆえの豊かさというものはきっとあると思います。

そうした限定的で閉鎖的でもある地域性やコミュニティにどっぷり浸かるのではなく、といってそこから完全に逃げるのでもなく、ゆるやかにつながりたい。そのためにはつながり方のいろんな可能性があることが必要だと思います。その一つが地域のコミュニティメディアでしょうし、そうした地域間、コミュニティ間をさらにゆるやかにつないでいくのが、「EDIT LOCAL LABORATORY」の役割だと考えています。

ローカルメディアは、直接的なまちづくりやまちおこしに寄与するものでは、必ずしもありません。むしろ大文字のまちづくりやまちおこしから考えるのではなく、自分たちはこれが好き、これがやりたい、を核としたコミュニティメディアがささやかな共感を読者へと広げて、小さなビオトープ、生態系のようなものができる。そういう小さなコミュニティが、たくさんできていくことが重要だと考えています。そのたくさんあるコミュニティに複数参加していくことで、これからの時代を生きる人たちの生活が、より重層的で、より豊かなものになっていくのではないかと思います。

ケーススタディ—❶

地域を変える エリアブックレット・ネットワーク

**エリアブックレットは制作・刊行・配本を通して、
地域に独自のネットワークをつくっていく。
その場所をテーマにその場所でつくられた本を、
その場所だけで売る「地産地読」と、
宿泊施設とカップリングして、多くの移住者を引き寄せる、泊まれる出版社。
二つのユニークな試みを紹介する。**

1 兵庫県豊岡市**NPO法人本と温泉**
城崎温泉でしか買えない、「地産地読」をめざす本と温泉プロジェクト

取材・文:**杉山衛** photo提供:**NPO法人本と温泉**

文人に愛された温泉街ならではのユニークな本

耐水性の高い用紙を選び、お湯に浸かりながらでも読めるように工夫された造本に、タオル地のブックカバー。タイトルは『城崎裁判』。城崎温泉で始まった「本と温泉プロジェクト」のためにベストセラー作家・万城目学が書き下ろし、NPO法人本と温泉によって2014年に刊行された短編小説だ。このプロジェクトからはその後も、城崎の冬の名物であるカニをかたどったブックデザインも楽しい、湊かなえ作の『城崎へかえる』(2016年)、温泉街にはつきもののゲタの表紙からジャバラ仕立てで展開する、tupera tupera(ツペラ ツペラ)による切り絵の絵本『城崎ユノマトペ』(2020年)と、人気作家が城崎をモチーフとして手がけるオリジナリティの高い本が刊行され続けている。そのいずれもが、ここ城崎温泉でしか買うことができないとあって、刊行のたびに大きな話題を呼んできた。

兵庫県豊岡市にある城崎温泉は、2020年に開湯1300年を迎えたという長い歴史をもつ。大谿川(おおたにがわ)に沿って開けた温泉街の川べりには柳の木が植えられ、木造三階建ての宿を始め、県の景観形成重要建造物にも指定されている個性的な橋梁群など、情緒たっぷりの町並みが多くの観光客を引きつけている。この温泉街の大きな楽しみの一つが、それぞれ特色をもった七つの外湯めぐりだ。ここ城崎温泉では、正装は浴衣姿とゲタ履きとされており、町をそぞろ歩きながら温泉を楽しむ人が多い。

こうした長い歴史と風情のある温泉街は、志賀直哉、有島武郎、与謝野晶子、司馬遼太郎など、多くの文人にも愛されてきた。なかでも志賀直哉は、療養のために訪れた城崎温泉での日々の体験をもとに、生と死をめぐる小説『城の崎にて』を書き、日本の私小説を代表する作品と評価されている。「本と温泉プロジェクト」は、志賀直哉の来湯100周年にあたる2013年を記念して何かできないか、と考えたことがスタートになったという。

キーマンがつなぐネットワークでプロジェクトが始動

プロジェクトの中心となったのは、45歳までの若手の旅館経営者を会員とする城崎温泉旅館経営研究会、通称二世会だ。「多くの文人が訪れた城崎温泉には、昔から〈文学といで湯のまち〉というキャッチフレーズがありました。でも僕らには、文学で城崎温泉をアピールするいい方法が考えつかなかった」と、NPO法人本と温泉の2代目の理事長を務める冨田健太郎さんは、そう振り返る。

城崎温泉には23の文学碑がある。また自分で詠んだ歌を投函する「歌のポスト」が4箇所に設置され、毎年度末には優秀作品を表彰するコンテストも行われている。1996年には、ゆかりの文人に関する展示を行う城崎文芸館も開館しているが、二世会のメンバー自身、観光客に訊ねられてもうまく説明できないくらい、文学とは疎遠になっていたという。

そんな二世会のよき相談役になったのは、後に城崎国際アートセンターの初代館長に就任した田口幹也さんだった。東京でメディア制作などに携わり、東日本大震災を機に豊岡市にUターンしてきた田口さんは、当時「おせっかい」という肩書きの付いた名刺を持って、まちづくりや市の広報・コミュニケーション戦略への提言を精力的に行っていた。現在本と温泉プロジェクトのプロデュースを手がけている、幅允孝(はばよしたかゆき)さんを紹介したのも田口さんだった。幅さんは東京でBACH(バッハ)という会社を主宰し、書店やライブラリーのディレクションや本に関するイベントなどを手がける「本」のプロだ。田口さんというキーマンの存在で二世会と幅さんたちの「縁」がつながり、プロジェクトは具体的な像を結び始めることとなった。

「歴史を継承しつつずっと残っていくコト、事業として継続して発信し続けられるコトを強く意識した」と、冨田さんは本づくりをめざした当時の二世会の想いを語る。その想いにふさわしく、志賀直哉来湯100年記念ではまず原点に還って『城の崎にて』の本編に、今の人にも読みやすいように解説書を付けた、2冊組函入りで刊行した。サイズも、浴衣の袂に入れて持ち歩けるようにと、文庫本の半分ほどの豆本にした。これと並行して始まったのが、著名な作家を実際に城崎に招き、その体験をとおして城崎にまつわる新作を書き下ろしてもらうというプロジェクトだった。

●NPO法人本と温泉の2代目の理事長の冨田健太郎さん。現在は次に出す本の企画を構想中

●川に沿って柳が植えられ、外湯めぐりの浴衣姿がそぞろ歩く風情豊かな城崎温泉

ここで生まれた本をここで読む「地産地読」

城崎で生まれた物語なら城崎で出版するのがふさわしいと、二世会のメンバーを中心にNPOを立ち上げ、本の制作は幅さんが、配本や在庫管理はNPOが担当することになった。しかし販売の手を広げるとNPOメンバーの旅館業務に支障が出てしまう。そこで発想を逆転し、町の旅館や土産店だけで売ることにした。そこから「地産地読」という独自のコンセプトが生まれてきた。

最初の書き手として白羽の矢が立てられたのは、京都や大阪を舞台にした小説で知られる大阪府出身の万城目学

左上●志賀直哉作の本編と、それより分厚い注釈が付いた、箱入りの豆本『注釈・城の崎にて』、2013年
右上●お湯に浸かりつつ読む。地産地読を象徴する造本となった『城崎裁判』、万城目学著、2014年
左下●冬の名物であるカニの殻から、つるんと中身が出てくる『城崎にかえる』、湊かなえ著、2016年
右下●温泉街を歩く下駄から展開される、ジャバラ仕立ての切り絵絵本『城崎ユノマトペ』、tupera tupera作、2020年

さん。万城目さんには冬と春の2回にわたり城崎に滞在してもらい、構想を練ってもらった。『注釈・城の崎にて』に続いて2014年に刊行されたこの『城崎裁判』も評判が高く、初版の1000部がわずか数週間で売り切れたほどだ。次の作者となった湊かなえさんは万城目さんの紹介だったが、湊さん自身、シーズンには毎年のようにカニを食べに訪れていた城崎ファンで、二つ返事で引き受けてくれたという。

「来てもらえれば、絶対城崎を気に入ってもらえるという自信はあった」と言う冨田さん。湊さんはもちろん、幅さんや万城目さん、最新刊を担当したtupera tuperaさんも、このプロジェクトを機に城崎温泉に魅了され、SNSやイベントなどをとおして今も交流が続いている。

「城崎を好きになってくれた人がつくり、城崎に来て、この町やお湯を体験してくれた人に読んでもらう。そこを目標に据えれば数を売る必要はなく、地元だけで売っていればいい。それが地産地読の考え方です。作家のみなさんも僕たちの心意気に共感して参加してくださっていますから、決して絶版にしないと約束しています」と冨田さん。こうした地産地読の本は、出版であると共に城崎のお土産品でもあることから、ブックデザインにも趣向が凝らされている。これまでは手頃なお土産品が少なかった城崎温泉だったが、今ではこの本を買うことを楽しみに足を運ぶ観光客も増えているという。

共存共栄のコミュニティーを補完するエリアブックレット

本と温泉プロジェクトが地元へもたらした影響も大きい。当初はあまり乗り気ではなく、「お付き合い」で本を置いてくれていたような旅館や土産物屋も、大きな反響と売れ行きに、NPOへ続々と注文を入れるようになった。つい先日も、『城崎裁判』を2時間かけて袋詰めし、その足で自転車で届けて回って来たという冨田さんは、町の人たちが地域の文化としての「文学」を見直し始めたと感じている。「かつては旅館の主人や町の人たちにも、文化人を受け入れる素養や度量があった。今回のプロジェクトで、そうした先人が培ってきた、文学を楽しむ下地ができてきたように思われます」と、冨田さんは言う。

七つの外湯とそれをめぐる楽しみを大切にしてきた城崎温泉には、もともと温泉街全体が一つの宿であるという考え方が根付いてきた。この風情ある城崎の温泉街は、じつは志賀直哉が来湯した12年後の1925年に起きた北但大震災とそれに伴う火災によって、ほぼ全域にわたって一度消失してしまっている。そこからの復興を果たしたことは、この地域の共有の財産ともなっている。そうした互助の精神から、1970年代には源泉を私有せず、町の共同の財産として管理運用する「財産区」の制度が確立されている。今回のコロナ禍直前までは、ちょうど本と温泉プロジェクトと同じ2013年頃から市がスタートさせたインバウンド戦略が功を奏し、わずか数年で外国からの観光客が30倍、40倍と伸びていたが、そんななかでも、団体客は受け入れないなど、みんなで町の風情を大切に育てていく精神が大切にされてきた。

「本と温泉プロジェクトはインバウンドと共に、観光客がピークを迎える11月から3月にかけてのカニのシーズン以外にも、人を呼べる仕掛けとして機能しています。2014年には行政主導で豊岡市を演劇の町として世界に発信する城崎国際アートセンターがここ城崎に置かれ、その相乗効果も期待されています」と冨田さん。海外からの観光客に向けては、『注釈・城の崎にて』の英語版の制作も構想中だという。世界的な演劇の町を目指す大きなアート政策とも共存しながら、本と温泉プロジェクトから生み出される「本」は、志賀直哉の『城の崎にて』に続く城崎温泉の文化的遺産になっていきそうだ。

2 神奈川県足柄下郡真鶴町 **真鶴出版**
出版と宿で真鶴の魅力を発信する

取材・文:**村田保子** photo提供:**真鶴出版**

真鶴の魅力を伝える「町歩き」

「泊まれる出版社」というコンセプトで、出版社とゲストハウスを運営する真鶴出版。川口瞬さんと來住(きし)友美さんのご夫妻が、2015年に真鶴の空き家を改装して移住し、同じ建物で自宅兼オフィス兼宿として、川口さんが出版、來住さんが宿の運営をスタート。2019年に向かいの空き家を使えることになり、その空き家を改装して真鶴出版2号店として宿の客室と出版社のオフィスを移転した。來住さんは、タイやフィリピンで国際協力に取り組み、NGOのインターンとしてフィリピンのゲストハウスで働いていたこともあり、帰国後に都市ではなく地方に住んで、ゲストハウスを運営したいと考えていた。川口さんは大学卒業後、IT企業に勤務しながら出版事業を開始し、インディペンデントマガジン『WYP』などを発行。來住さんがフィリピンに行くタイミングで退職し、一緒にフィリピンに渡り、英語留学していた。二人でフィリピンから帰国すると同時に真鶴へ移住し、それぞれがやりたかった事業を開始。移住先を真鶴に決めた理由は、地域活動をしている知人のフォトグラファーから紹介されたことがきっかけだった。真鶴町が取り組む「くらしかえる真鶴」という試住プロジェクトの第1号として、2週間の移住に向けた生活を体験。商店街にある空き家を改装した物件で暮らし、真鶴町役場の職員の案内で町を歩いたり、物件を巡ったりしながら、商店街や地域の人と交流していくなかで、町への愛着を深めていったという。

真鶴は神奈川県南西部の真鶴半島にある小さな港町で、東京からは電車で約1時間半。港に向かうすり鉢状の地形に、網目のように複雑に入り組んだ路地が張り巡らされ、家や商店が連なっている。この路地は「背戸道」と呼ばれる真鶴ならではの特徴の一つ。すれ違う人の距離を縮めると共に、暮らしの気配が路地に滲み出ている様子が、このエリアの大きな魅力となっている。

ゲストハウスとしての真鶴出版が宿泊者に提供するサービスに、「町歩き」というものがある。「背戸道」を1～2時間かけて歩きながら商店や港を巡り、出会った町民と交流していく体験を提供するもので、試住期間に川口さんと來住さんが体験した、地域の人たちとの交流を通して、感じることができる真鶴の魅力を伝える機会となっている。

「不思議なもので、ゲストがその時に求めている町民に出会うことが多く、偶然の出会いの面白さを喜んでいただいています。移住希望者は移住を叶えた人と出会って、その経験を聞くことができたり、建築を仕事にしている人が移住者の建築家と出会って、真鶴の建物について会話が弾んだり、それぞれのゲストが会うべき人に会って、真鶴を深く知るきっかけにしてもらっています」と川口さん。宿泊者が地域の商店で買い物や飲食をすることも、地元の商店の人たちから歓迎されており、地域内で真鶴出版の出版物を販売する店舗なども増えているという。

真鶴に住む人に地域の魅力を伝える

川口さんと來住さんが移住した翌年に発行した『やさしいひもの』は、お二人が真鶴に移住した時に感動したと

●真鶴出版の川口瞬さん（左）と來住(きし)友美さん

いうひものについて、食べ方や歴史などを紹介した一冊で、町にある3軒のひもの店と協力して制作した。この本の最大の特徴は、「ひもの引き換え券」が付いていること。この券を真鶴のひもの店に持って行けば、もれなくひものがプレゼントされる。書店や真鶴出版のウェブページなどを通して1000部を販売し、200枚以上の引換券が回収された。引換券利用者のなかには、真鶴出版に泊まった人もいるという。

「出版は真鶴という地域や宿の広報部門にもなっていると思います。全国の書店で宿の宣伝ができるのは、大きなメリットです。書店の方や本を見つけてくれた方がインターネットやSNSで発信してくれて、広がっていったという面もあります」と川口さんは話す。

真鶴出版では、出版物を通して地域外の人へ真鶴の魅力を伝えると共に、地域の文化を掘り起こし、出版物として発行していくことにも取り組んでいる。『奇僧　風外道人』は、風外という僧侶が真鶴に暮らしていたことを発見するまでの経緯をまとめた本で、著者は真鶴町の初代町長。絶版になっていたこの本を、著者の孫からの提案で復刻することを決めた。この他、近所に住む70代の女性の詩集を出版したことをきっかけに、「真鶴文庫」というシリーズを立ち上げ、今後は町民の方に向けた自費出版というかたちでの展開も予定している。インターネットの普及により、広くたくさんの人に情報を届けるという出版の意味や役割に変化を感じていたという川口さんは、真鶴に出版社があることで、少数の人が喜んでくれるような地域に向けた出版の必要性を感じ始めたと話す。

「どこの地域も同じだと思いますが、ずっと地域内に住まわれている方は、自分の町の良さに気付きづらいところがあります。地域内の出版活動を続けていくことで、住んでいる方が『真鶴の町っていいよね』と感じてくれるきっかけになったら嬉しいです」

真鶴出版の人気商品として毎年発行している『港町カレンダー』についても触れておきたい。画家の山田将志さんが描く港町の暮らしを切り取った絵をカレンダーにしたもので、山田さんによるエッセイやマンガなども付いている。このカレンダーは2021年で4年目の発行を迎えるが、最初の2年間は地域の人に向けて『真鶴カレンダー』というタイトルで販売。古い駅が描かれた絵を見て、「この駅が大好きなのだけど、そろそろ取り壊されるのではないかと思っていたから、カレンダーになって嬉しい」と泣いて喜んでくれた高齢の方もいたという。

川口さんは、町歩きを継続していくなかで、最初の頃は「なんでわざわざこんなところに来るの？」と不思議がっていた商店の方が、「こういうところが好きなんでしょ？」とわかってくれるようになった変化も経験。地域の方々へ働きかけることの意味を日々感じているという。

共通項をもつ層に届ける

真鶴出版の出版物は、地域内、地域外の垣根を越えて、さまざまな方向へ展開を見せている。なかでも『やさしいひもの』は韓国語版の出版へと発展している。これは、真鶴出版に宿泊した韓国人の女性からオファーがあったもので、この韓国語版を見て真鶴出版を訪れたゲストもいるという。出版と宿の相乗効果が海を越えて広がっていることに驚かされる。『真鶴カレンダー』は、『港町カレンダー』と名称を変え、東京や大阪など国内各地のギャラリーや店舗などで原画展と常設での販売が行われ、地域外の人たちへと展開しているが、こちらも英語版の作品集をつくり海外で販売することを目指している。

川口さんは、真鶴を好きになる人には共通項があると話す。知名度が高い場所や人が多い場所が苦手で、海や自然を感じながら自分と静かに向き合いたいというマインドをもっており、それは海外の人にもあてはまるという。クリエイターや建築家、写真家、まちづくりにかかわっている人も多く、同じようなことを考えている人が世界中から集まってきていると分析する。

「もともと真鶴出版が発行する出版物は部数も少なく、それほどたくさんの方に届けようという気持ちは強くありません。地域外への出版活動としては、今後も国内外を問わず、共通項をもつ一定の層に届けばいいなと思っています」

そう話す川口さんが、ずっとやりたいと考えていたのが「全国のローカルプレイヤーと一緒に出版物をつくること」だった。2021年5月、地域の日常を再発見する雑誌『日常』を発行し、それを実現した。雑誌『日常』は、一般社団法人日本まちやど協会の宮崎晃吉さんの呼びかけにより企画がスタート。まちやどとは、まち全体を宿として見立て、まちぐるみで宿泊客をもてなし、地域価値を向上させていく仕組みで、全国の22の宿泊施設が日本まちやど協会に参加している。まちやどの一つでもある真鶴出版が発売元を担い、川口さんは編集長として制作に携わり、年刊誌というかたちで継続していく予定。エリアを横断する媒体とローカルプレイヤーのつながりが、今後どのように展開していくか楽しみだ。

上●「背戸道」と呼ばれる真鶴の路地
右●港に向かってすり鉢状になった地形が特徴的な真鶴の風景

左●真鶴出版宿泊者へのサービスとして行っている「町歩き」
上●地元の商店の人と会話をしたり、「背戸道」を始め、真鶴らしさを感じられる町並みを巡る

自分たちの暮らしを豊かにすることで町も豊かになる

ここ数年で、真鶴はテレビや雑誌などのメディアに取り上げられることが多くなり、移住先として興味や関心をもつ人が少しずつ増えていることを、川口さんは実感しているという。真鶴出版の「町歩き」で町民に出会ったことをきかっけに、移住を決めた人もいれば、川口さんが立ち上げた移住希望者がつながるSNSなどのネットワークがきっかけになった人もいる。パン職人の修行をしていた人が真鶴出版に宿泊し、川口さんや町民から「町にベーカリーができたら嬉しい」という声を聞き、実際に移住してベーカリーをオープンしたケースもあるという。同様に真鶴出版をきっかけとして、真鶴に移住した人が、コーヒー店やカレー店などを始め、徐々に町に活気が生まれている。

「自分で商売をする人が増えて、小商いが集まる町になっていったら面白いですね。移住者を増やすことを目的として活動しているわけではありませんが、真鶴を好きな人を増やしたいとは思っています。ただ、町のためにやっているわけではなく、自分たちの生活を豊かにするためにやっているという姿勢が基本であり、それは今後も大切にしていきたい。その結果として町もよくなったらいいなと考えています」

川口さんが、今後やってみたいことは、『日常』で実現した他の地域のプレイヤーと協働する体験を、地域内にも広げていくことだという。

「『日常』の編集などを通して、他の地域の取り組みを知ることで、そういった考えが出てきました。たとえば、地域内の移住者と一緒に、新しい場所をつくり、運営していくことなどをイメージしています。場所が欲しいということではなく、一緒に何かをつくり、継続していくという体験をすることで、地域がより強くなっていくのではないかと考えています」と川口さん。

綿密な計画が最初にあるわけではなく、動いていくなかで生まれる出会いやアイデアを丁寧に拾ってかたちにしていく。主体はあくまで自分たちの暮らしであるという自然体な活動は、静かに多くの人を巻き込みながら広がり続けている。

ケーススタディ―❷

まちの魅力、徹底的に伝えます!

自分たちが暮らす町で、地域の情報や魅力を伝える
エリアブックレットをつくろうという動機の背景には、
その町への愛着や誇り、何かを変えたいという課題があるはずだ。
各地域で魅力的なエリアブックレットの制作に取り組む編集部・編集人に、
創刊の経緯やコンセプト、制作の喜びや苦労をうかがう。

取材・文:**斎藤夕子**

1 盛岡の、飾らない「ふだん」を伝える『てくり』

photo提供:**まちの編集室**(※特記のないもの)

創刊	2005年
発行	年2回
定価	660円(税込)
編集・発行	まちの編集室 (有限責任事業組合まちの編集室)
代表者	赤坂環・木村敦子・水野ひろ子
所在地	岩手県盛岡市
URL	https://tekuri.net

2005年5月、盛岡市のリトルプレスとして創刊した『てくり』。フリーランスの編集者、ライター、デザイナーらが、日頃の仕事では疎かにできない、クライアントや広告主の意向から離れ、「自分たちがつくりたいものをつくろう」と意気投合したことをきっかけに誕生した。話し合いをスタートした2001年当時、6名だったメンバーは紆余曲折を経て、いずれもフリーランスの編集者・ライターの赤坂環さん、水野ひろ子さんと、デザイナーの木村敦子さんの3名で、有限責任事業組合まちの編集室を設立。創刊以来、常に3名で毎号の企画を練り、取材・執筆、誌面構成を行いながら、年に2回(春・秋)発行し続けている。

コンセプトは「伝えたい、残したい、盛岡の〈ふだん〉を綴る本」。『てくり』の名の由来は毎号の奥付に記されており、そこにはいろんな思いが込められていることがわかるが、一つには「てくてく」よりもゆっくり、「てくり、てくり」と歩く速度で、「この街にしかない〈毎日〉を大切にしたい」と考えてのものだ。

「集まったメンバーが、みんな同世代の女性だったので、日常生活で考えていたことに共通点がありました。全国的にそうだと思いますが、盛岡でもその頃、郊外に大型店ができて市街地の古い建物がなくなってきたり。身近にあったものが失われていくことを目の当たりにして、今あるものを残したい、記憶に残るように記録しておきたいという方向性が、話し合いのなかで出てきました」(赤坂さん)

「お手本にしたのは、イラストレーターの大橋歩さんが1人でつくり、取次も通さずに販売し始めた雑誌『アルネ』[*1]です。誌面が素敵だったことはもちろん、出版社じゃなくても雑誌をつくって、販売もしちゃっていいんだっていう気付きをもらいました」(木村さん)

創刊が具体化してきた当時、たまたまメンバーが一緒にした仕事の報酬が、冊子を1000部印刷できるほど残っていた。制作費に関しては、広告を掲載してしまうとそれが手かせ足かせになってしまうと考え、最初から掲載しないと決め、完全に手弁当でスタート。そうして1000部刷り上がった創刊号「橋をわたって、川をこえて。」には500円の定価を付け、自分たちの足で、知り合いの書店や喫茶店などを回り、少しずつ置いてもらった。この他県外でも、京都の恵文社など自主制作本を取り扱っている書店に連絡をとり、置いてもらうことができた。そのなかの一つ、盛岡市の老舗書店「さわや書店」では、カリスマ店長として全国にも知られた伊藤清彦店長(故人)の後押しもあり、創刊号が飛ぶように売れた。

「今でも覚えているけど、さわや書店に行ったら、伊藤店長が〈売り切れちゃったから増刷しないか〉って言ってくれて。その場で水野さんに電話をかけて〈どうする? 刷っちゃう? もう1000部刷っちゃう?〉って」(木村さん)

「それで1000部刷ったら、それも売れちゃったから、結局また1000部刷ったんだよね。一辺に刷れば印刷代も安く済んだのに」(赤坂さん)

盛岡では書籍が3000部売れればベストセラーと言われているそうだが、『てくり』創刊号はその3000部をクリア。「こんなに売れるなんて、すごく驚きました」。以降、特集の内容によって多少の増減はあるが、基本的には3000部を発行し続けている。なお、制作費・印刷費は毎号の売り上げで賄い「ずっと自転車操業」と笑う。

最新号である29号は、2021年4月に発行された。特集テーマは「My Standard 〈ふつう〉を更新する。」。じつは前号の28号から、1年半ほど空いての発行となった。コロナ禍にあって、感染者ゼロが長く続いた岩手県では、なおさら、外に出て人と会うことが難しく、特集テーマ決めも難航したという。コロナ禍前には「東北ディスティネーションキャンペーン」に絡めた特集も考えたが、改めて「ふつう」の日常を問い直す、原点に立ち戻ったテーマとなった。

また『てくり』は、表紙の写真から、全体を通してグラフィックの美しさも特徴だが、この写真も、レギュラーカメラマンである奥山淳志さんを中心に、ネガ撮影の紙焼きプリントを使用しているという。最近では印画紙の製造が減っているため、一部、デジタル化もしているが、今なお、約8割が紙焼きだそうだ。

●まちの編集室の3人。左から、水野ひろ子さん、木村敦子さん、赤坂環さん

「ヴィジュアル誌のように見えるけど、文字量も多いし、内容も結構硬派なんだよね」と木村さん。赤坂さんは、「ちょっと硬いんだよね、私(笑)。ただ、『てくり』は情報誌ではなく、読み物。人や町の記録としてつくってい

●『てくり』最新刊、29号の特集は「My Standard 〈ふつう〉を更新する。」(photo:坂本政十賜)

●今なお、写真の8割は紙焼きプリントを使用しているというヴィジュアルの美しさには定評がある

●盛岡市内には北上川・中津川・雫石川が流れ、空が広く感じられる。『てくり』創刊のテーマも「川」だった。なかでも「中津川」は、制作者の3人が気に入っている盛岡の風景の一つ

●毎年10月頃になると、中津川にはサケが遡上してくる

●宮沢賢治ゆかりの民芸店として知られる光原社の喫茶・可否館。ここも3人が気に入っている場所

るので、情報が古びることもない。丸一日でじっくり読めるくらいのボリューム感であることは意識してつくっています」。

今回の取材では、都合がつかなかった水野さんにはお話をうかがえなかったが、赤坂さん、木村さんの掛け合いから、『てくり』独自のスタイルが生まれていることが伝わってきた。しかし、ずっと3人でつくってきた雑誌であるだけに、その継続性については課題もあるという。木村さんは、お手本にしてきた『アルネ』が30号で終了したことを意識しているとも語った。ただ、コロナ禍は大きなきっかけの一つだが、働き方や暮らし方、「日常」に対する意識が大きく変化しつつある今だからこそ、「てくり、てくり」とスローダウンした視点で、「ふだん」を綴る雑誌の存在は、とても頼もしい。

＊1―『アルネ』：2002年10月～2009年12月まで、季刊誌として年4回発行されていた雑誌。企画・取材・撮影・編集・デザインのすべてをイラストレーターの大橋歩が行う。流通コードをもたない自社発行出版物として販売された。

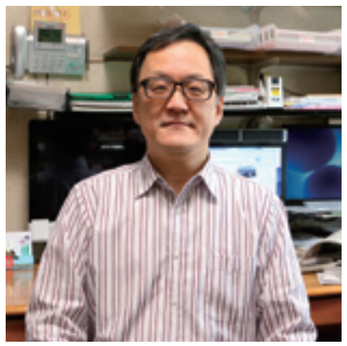
2 熟年世代のコミュニケーションツール『みやぎシルバーネット』

photo提供：**千葉雅俊**（※特記のないもの）

2021年3月、河出書房新社から『シルバー川柳　明日があるさ編』という単行本が発刊された。『シルバー川柳』シリーズとしては第15弾（15冊目）にあたり、帯には「シリーズ累計40万部!」と記され、その人気ぶりを伝えている。編者は「みやぎシルバーネット＋河出書房新社編集部」。この『みやぎシルバーネット』とは、「60歳からの情報紙」として、宮城県仙台市を中心に、毎号3万6000部が配布されている月刊のフリーペーパーだ。その人気連載が、読者から投稿される「シルバー川柳」である。

『みやぎシルバーネット』の創刊は1996年11月。モノクロ4ページのタブロイド判として創刊し、2005年に8ページ化、2006年からはオールカラー8ページへと進化しつつ、2021年7月末現在までの25年間、通巻297号に至るまで、毎月発刊され続けている。配布エリアは仙台市内を中心に、隣接する多賀城市、名取市、岩沼市の一部。2007年からは毎日新聞への折込がスタートし、現在の発行部数へと増刷された。

創刊	1996年
発行	月刊
定価	フリーペーパー
発行	みやぎシルバーネット
代表者	千葉雅俊
所在地	宮城県仙台市
URL	http://silvernet.la.coocan.jp



●『みやぎシルバーネット』編集長の千葉雅俊さん

発行人である千葉雅俊さんは、仙台市の広告代理店勤務を経て独立。前職でタウン紙の制作に携わっていた経験を生かし、1人で「みやぎシルバーネット」を立ち上げた。最初こそ、デザインは外注していたが、今ではデザインソフトも自在に操り、制作のすべてを1人で行っている。

「前職でタウン紙をつくっていた時にも、若者向けの情報を取材するよりも、お年寄りから話を聞いて記事をつくる方が楽しいと感じていました。また町を見わたすと、若者向けの情報紙はかなりありましたが、お年寄りに焦点を当てた情報紙はほとんどありませんでした。フリーペーパーをつくるには、制作費を捻出するために広告を出してもらう必要がありますが、その点に関しては前職で知り合った営業マンが手伝ってくれるというので、やってみることにしたんです」

高齢者向けの行政サービスや健康サポート情報、あるいはイベント情報など、お年寄りが必要とする情報をわかりやすく提供することを旨とした『みやぎシルバーネット』だが、創刊号では、仙台ゆかりの著名人・さとう宗幸のインタビューを1面に載せるなど、高齢者に限らず、広く興味をもってもらえるような工夫を凝らした。発行部数は1万部。創刊当時、仙台市内には行政が運営する市民センターが約50カ所、老人憩いの家が約50カ所にあることから、「それぞれ100部ずつ配れば1万部になると思って設定した数字です」と千葉さん。しかし現実は甘くなかった。配布もすべて自分の足で始めた千葉さんだったが、そもそも設置の承諾を得るだけで一苦労。施設側が受け取ってくれても、利用者の目につく場所には置いてもらえなかったり、スペースがないからと、事務所内にしまわれたままになっていることもしばしば。翌月2号目を持って行くと、1号目が丸ごと残っていることも珍しくなかった。

●タブロイド判、8p、オールカラー『みやぎシルバーネット』。毎号、お年寄りにとって必要な情報が満載されている。ホームページ上でバックナンバーを読むことも可能（photo:坂本政十賜）

●大人気連載「シルバー川柳」。毎号の課題をもとにたくさんの川柳が寄せられる。写真の2021年6月号では「拠り所」という課題に対し、投稿総数228通が寄せられた（photo:坂本政十賜）

●千葉さんは高齢者向けのイベントで「シルバー川柳」の講習会なども行っている。講習会に参加したことをきっかけに投稿者となり「生きがいができた」というお年寄りも少なくない

●『みやぎシルバーネット』から誕生したシルバー川柳シリーズ第15弾『シルバー川柳　明日があるさ編』（河出書房新社、2021）と『みやぎシニア事典vol.5』（金港堂出版部、2019）（photo:坂本政十賜）

そこで千葉さんは単に施設に配布するだけではなく、お年寄りが確実に手にとってくれる方法を模索。施設ごとの残部を見極めて配布部数を調整すると共に、配布先も工夫し、仙台市の高齢者ネットワークである「仙台市老人クラブ連合会」の重鎮に相談をして、各地の老人クラブに配布できるようになった。さらに市内の各病院にも設置を依頼して回った。そうして約3年後、配布予定部数が1万部では不足するようになり、1万1000部へと増刷することに。千葉さんは、「この時の達成感は格別。25年間で一番嬉しかったかもしれない」と当時を振り返る。

千葉さんは現在も、『みやぎシルバーネット』の大半（新聞折込や郵送しているもの以外）を、毎月3日間ほどかけて配布して回っている。

「現場を回って配布しているからこそ得られる情報があります。フリーペーパーは、つくって満足しているだけではダメで、それが、どこで、どれくらい読者に届いているのかを知ることが大切です」。それは単に制作のモチベーションという話ではない。フリーペーパーに出稿してくれる広告主への責任でもあるという。

そして「シルバー川柳」である。当然、読者の増加に伴い投稿数も確実に増えた。今や、毎月ハガキや封書で220通前後の投稿があり、しかも、1人で5作前後投稿してくることも珍しくない。千葉さんはそれらに丸2日かけて目を通し、特選1作、秀作3作を選ぶ。さらに「できるだけ多く掲載する」ことをモットーに、紙面2ページを使って約300句を掲載している。読者は紙面にギッシリと掲載された川柳を見ては、知り合いの名前を探したり、より良い作品をつくろうと意欲を燃やすのだ。

しかもこれまでには、川柳の投稿を通じて川柳同好会が誕生したり、一緒

にカラオケをしたり、旅行に行くグループも誕生したという。時には、投稿された川柳に感銘を受け、ぜひ作句者と連絡をとりたいという問い合わせもあるそうだ。

紙面にはこの他、読者からの手紙や、絵手紙も多く掲載されている。それらを読んでいると、この『みやぎシルバーネット』が、いかにお年寄りの毎月の楽しみ、生活の拠り所として定着しているかが如実に伝わってくる。『みやぎシルバーネット』の存在は、仙台市とその周辺のお年寄りの暮らしに彩りを与え、地域の活力創造に貢献していることは間違いない。

3 「右京びと」こそが地域の宝物『右京じかん』

photo提供：**NPO法人子育ては親育て・みのりのもり劇場**

今年で創刊10周年を迎えた『右京じかん』。横位置のA5判、中綴じ、24ページという、コンパクトな小冊子だ。京都市右京区のフリーペーパーとして2012年春に創刊して以来、コンスタントに年4回発行され続けている。発行元のNPO法人子育ては親育て・みのりのもり劇場は、子育て支援からスタートし、現在はさまざまなまちづくり事業を展開している。

NPOが拠点とする京都市右京区太秦は、言わずと知れた時代劇映画の聖地。東映の京都撮影所にも近い大映通り商店街の真ん中に建つレトロな佇まいの建物「うずキネマ館」の2階がNPOの事務所であり、『右京じかん』の編集部だ。その1階、古い映画のポスターやパンフレット、古い映写機などが並び、さながら映画博物館のような雰囲気のカフェ「キネマ・キッチン」もNPOが運営。商店街を元気にすると共に、子どもをもつお母さんたちの雇用を創出することを目的としている。

『右京じかん』の発行も、同様の目的からNPOの事業としてスタートした。編集部もNPOスタッフが兼任している。とはいえ、雑誌編集の経験者は1人もいない。NPO理事長であり、編集長を務める伊豆田千加さんは、テレビの制作会社の勤務経験をもつ映像畑出身者。そもそも2009年に設立したNPOも、もともとは同じ幼稚園に通っていた子どもをもつ保護者会のお母さんたちの活動から誕生しており「最初はNPOとNGOの違いもわからなくて、〈井戸でも掘りに行くの?!〉って言ったくらいです」とは、事務局長を務める森淑子さんだ。「だから雑誌をつくるっていっても、何をどうすればいいのか、さっぱりわかりませんでした」と言葉を継ぐ。だが、最初からコンセプトははっきりしていた。伊豆田さんは「右京の魅力は人の魅力。これだけ面白い人が集まっているんだから、それを紹介しよう」と、取材経験などないスタッフを町に送り込んだ。「スタッフ自身が魅力的な右京びと。すばらしい〈嗅覚〉をもっているし、相乗効果で、必ず面白いものを見つけてくるに違いないと思ったんです」と語る。その感覚は見事に当たり、最初から1万部印刷した冊子は想像以上の速さでなくなった。「最初から1万部刷るなんて、何も知らないからできたこと。図書館や地域の商店に配って歩くだけでも大変でした」と森さんは当時を振り返る。今では、各地に配布するとあっという間になくなってしまい、ほとんど残部がないのだという。

創刊	2012年
発行	年4回
定価	フリーペーパー
発行	NPO法人子育ては親育て・みのりのもり劇場
制作	右京じかん編集部
編集長	伊豆田千加（NPO法人子育ては親育て・みのりのもり劇場理事長）
所在地	京都府京都市
URL	https://ukyo-jikan.com/

そんな人気の一因には、写真の「良さ」がある。表紙に使用される写真も含め、その多くは、いわば素人のスタッフが取材中に撮影したもので、いわゆるクオリティの高い写真ではない。だが、撮影している人と撮影されている人の間に流れる温かな「じかん」が、そこには見事に映し出されている。

人にスポットをあてていることを象徴するのが、創刊からの人気連載「まちかど笑顔図鑑」だ。毎号、取材先などで出会った人々10名前後の笑顔を掲載、お名前と一言コメントを掲載している。伊豆田さんは「いずれは右京に暮らしている人全員、『右京じかん』に載せたいんです」と語る。また『右京じかん』を紹介するうえで欠かせないのが、2号から17号まで続けた連載「うきょうわらしべ」の成果だ。これは、読者参加型の企画として昔話「わらしべ長者」よろしく、誌上で物物交換を呼びかけるという連載だった。その最初、ご当地限定パッケージのチロルチョコから始まった物々交換が、約4年、15回の交換で右京区京北にある古民家（土地付き）になってしまったのだ。

「古民家の提供者が『右京じかん』を通じて私たちNPOの活動を知り、空き家になっている住まいを活用して欲しいと交換を申し出てくださったんです」と森さん。市の補助金やクラウドファンディングで資金を得て改修し、現在は移住者支援やコミュニティ創出の拠点として活用されているという。

●『右京じかん』を制作するNPO法人子育ては親育て・みのりのもり劇場のスタッフ。左に立っているのが伊豆田千加さん。SDGsホイールの中、下段中央が森淑子さん

●vol.14（2015年夏号）の特別企画「右京・きもだめし」の記事

●vol.19（2016年秋号）の記事。おばあちゃんと通い猫の心温まるレポート

●『右京じかん』バックナンバー。創刊号の表紙となったのは、取材後間もなく閉店してしまった「理容ノマ」のご主人。この出会いが、「右京のじかんをつくってきた人」に焦点をあてるという、本誌のコンセプトを決定付けた

●「うきょうわらしべ」で誕生した「わらしべの家」の完成を伝えたvol.26（2018年夏号）

●大映通り商店街に建つ「うずキネマ館」。1階はカフェ、2階はNPOの事務所

●「うずキネマ館」のすぐ近く、映画の神様として知られる三吉稲荷神社

そして、さすがに毎号1万部があっという間になくなってしまうだけあって、右京エリアにおいて、『右京じかん』の認知度は相当に高い。「知っている人が出てないか」を確認するのは、右京の人々にとって年4回のお楽しみになっているのだ。しかも創刊から間もなく、同じような冊子を自分たちの地域でも出したいという問い合わせも多く得るようになった。そこで、冊子づくりのノウハウと「○○じかん」という統一的なロゴを有償で提供するかたちで、現在、京都府内の異なる六つの母体から、それぞれ「京都じかんシリーズ」が刊行されている。なお『右京じかん』を始め、京都じかんシリーズのロゴは味わいのある手書き文字だが、じつは、これらすべて伊豆田さんが書いている。

「『じかん』と名付けたのは、今目に見えている人や物にはすべて過去も未来もあって、さらに今この時間を大切にしたいと考えたから」と伊豆田さん。コンセプトである「右京に住む人、働く人、訪れる人の小さな愛読書」として、右京に流れる時間を、これからも丁寧に、記録し続けてくれるに違いない。

4 萩の「キュン」とした魅力を伝える『つぎはぎ』

photo提供：**つぎはぎ編集部**

創刊	2018年
発行	年1回
定価	フリーペーパー
発行	萩市ふるさとツーリズム推進協議会（vol.0） つぎはぎ編集部（vol.1,2） 萩まちじゅう博物館 文化遺産活用事業実行委員会（vol.3,4）
企画・編集	つぎはぎ編集部
代表者	石田洋子、河津梨香、松田澪衣菜、山本明日美
所在地	山口県萩市
URL	https://tsugihagi.info/

2018年7月に、準備号としてvol.0を創刊、同年12月にvol.1を発行して以降、おおむね1年に1冊のペースで発行しているフリーペーパー『つぎはぎ』。「山口県萩市とその周辺の魅力を伝える」リトルプレスで、コンセプトは「ひかりを集める、次につなげる」。2021年3月に発行された最新号（vol.4）で通算5冊目となる。『つぎはぎ』というタイトルが、萩市の「はぎ」に由来することは言うまでもないが、萩市のさまざまな魅力をパッチワークのように集め、次の萩へとつなげていくという想いも込められている。

制作している「つぎはぎ編集部」は4名の女性からなり、全員が萩市への移住者。山本明日美さんは、学生時代、まちづくりを学ぶために萩市に来て以来、その魅力に触れ移住。現在はNPO萩まちじゅう博物館に勤務している。松田澪衣菜（れいな）さんも学生時代、萩市のゲストハウスのスタッフとして住み込みでのアルバイトを経験、その後一旦は東京で就職するも、萩市での暮らしが忘れられず移住を決意。現在は県内のデザイン事務所に勤務している。以前から編集者・ライターとして活動していた河津（こうつ）梨香さんは地域おこし協力隊をきっかけに萩市へ。現在はご主人と共に萩市での体験プログラムを提供する「はぎまえ６９８合同会社」を主宰している。東京のIT企業に勤務していた石田洋子さんは、自然豊かな環境を求めて家族で萩市に移住。「半農半X」な暮らしを模索しつつ、住まいである古民家で「つぎはぎ農園」と名付けた民泊も運営している。普段はそれぞれに活動しながら、随時集まっては次号の企画を検討したり、取材に赴く。『つぎはぎ』は年1冊だが、「つぎはぎ編集部」としては2020年に萩市広報課から、萩と出身者をつなぐふるさと情報誌『はぎのね　―萩ネットワーク―』の制作を受託。こちらは季刊誌として年4回発行しており、この10月に8号目が発行される。

●「つぎはぎ編集部」。右手奥から時計回りに、山本明日美さん、河津梨香さん、松田澪衣菜さん、石田洋子さん。萩ゲストハウスrucoにて

『つぎはぎ』の特徴は、毎号、冊子の判型が変わり、取り上げる内容にも定型がないという自由さだろう。「毎号、やってみたいことをやっています」と言うのは松田さんだ。「同じ形に収まりたくない（笑）」。しかも、フリーペーパーでありながら広告が入っておらず、その代わりに、号によって発行元が異なる。これについて山本さんは「自由に好きなものを取り上げながら、私たちが移住を決めた時に〈キュン〉としたような、萩の魅力を伝えたい」という思いの表れで、そのために、毎号、制作費を支援してくれる団体と意見を交わしながら制作を続けているからだと教えてくれる。ただし、松田さんは「好きなことをするためには、責任も伴うことは常に意識しています」とも。石田さんは「地方都市では、何事も〈継続〉が難しい。人材の高齢化や人口の少なさで農業も、お店も続けられないことが多い。始めるのは簡単だけど、続けるのは難しいと言われているなかで、年に1冊でも、続けていくことが私たちのメッセージだと思っています」。

一方で、地域の魅力を伝えるリトルプレスの存在が、まちづくりに直接つながるとは思わないという冷静な視点も。河津さんは「私たちが移住してきたということは、そこに何らかのかけがえのないものを見つけたから。その何かを私たち自身が伝えていくことで、市内外の人が魅力に気付くきっかけなればいいのかなと考えています」と語る。

つぎはぎ編集部に編集長はいない。四者四様の思いを毎号の企画にぶつけ、その準備段階では「企画メモだけで3～4ページにわたる膨大なものに」なってしまうなかから、4人でフラットに話し合ってテーマを決めているそうだ。また準備号は8000部ほど印刷したが、その後はおおむね3000部ほど。市内の図書館や喫茶店に配布している他、バックナンバーはウェブサイト上でも閲覧できる。ただウェブ上の閲覧では、毎号で異なる判型を実感できずに少々物足りない。フリーペーパーであるだけに冊子単体での販売は難しいのだが、最新号では石田さんの発案で萩市の米農家でつくっている「お米のシロップ」とのセット販売が試みられている。

現在は、2022年春に発行予定のvol.5の発行元の算段もつき、企画案をまとめ始めたところだ。次の萩へ、4人が「キュン」とした魅力が伝わり続けていくことを期待したい。

●毎回、判型が異なる『つぎはぎ』のバックナンバー

●「萩の食と人の暮らし」をテーマにしたvol.3（2020年3月）と、「萩のおたから」をテーマにしたvol.4（2021年3月）の記事ページ

●4人が好きな萩市の風景の一つ「菊ヶ浜」。北長門海岸国定公園内にあり、白砂青松の海岸としても知られる

5 島々をわたる瀬戸内の風を全国へ『せとうちスタイル』

photo提供：**株式会社瀬戸内人**（※特記のないもの）

創刊	2017年
発行	年1回（2021年4月より）
定価	1200円（税込）
発行	株式会社瀬戸内人
代表者	柳生敏宏
編集長・チーフライター	山本政子
所在地	香川県高松市
URL	https://setouchistyle.jp

「誌面を開いた時に、瀬戸内の風がふわっと吹いてくるような雰囲気を大切にしています」。編集長でチーフライターの山本政子さんがそう語る『せとうちスタイル』は、香川県を拠点に、瀬戸内地方全体、小豆島や直島を始め、瀬戸内海に点在する700以上の島々を含むエリアの情報を発信する地域雑誌だ。創刊は2017年4月。ただその前身は2009年4月に創刊した『せとうち暮らし』で、通算すれば今年で12年目となる。

『せとうち暮らし』は、瀬戸内海の島々への移住を促すためのフリーペー

パーとして創刊した。初代編集長を務めた小西智都子さんは、当時、フリーランスのデザイナーとして活動すると共に、高松市のまちづくり活動にも携わり、主宰するまちづくり団体が香川県の移住促進事業を受託。その事業の一環として誕生したのが『せとうち暮らし』（A5判、24ページ）という小冊子だった。県内外の若者に、瀬戸内海の島の魅力を伝えることを目的とした雑誌は、「女木島」「男木島」など、1号=1島を紹介するスタイルで、2010年の事業終了まで5冊発行された。この時、制作スタッフとして集まったのは、ライターやカメラマンといった雑誌制作のプロだけではなく、町や地域に関心をもつ考古学者や古書店主らなど約10名。フリーランスのコピーライターとして活動していた山本さんも、副編集長として創刊時から参加した。雑誌をつくる、ということよりも、島の暮らしや文化・歴史などを伝えることを目的としていたこともあり、その制作スタイルは独特で、「まずはみんなで島に行き、足で歩き回って島の方々に話を聞き、そのなかから伝えるべきことを考えていく。その後も、何度も島へ通いながらつくっていきました。そうやって一つひとつの島にじっくりと向き合うことができたことは、本当にいい経験になりました」と山本さん。「ですから県の事業が終了した時に、かかわってきたスタッフそれぞれが、まだ、島の方々からもらったものをすべてお返しできていない、といった想いをもっていたような気がします」。そんな「想い」に支えられ、小西さんが設立した個人出版社・ルーツブックスから、無事、6号が発行されることになった。

6号からは、タイトルはそのままだがデザイン、判型を刷新。書籍コードを取得し、価格を付けて商業出版物とし、年3回発行されることとなった。

さらなる変化が訪れたのは2015年。オリーブを使った化粧品、食品、健康食品の開発・製造・販売事業、地域活性化事業などを行う小豆島ヘルシーランド株式会社の創業者が、たまたま見かけた『せとうち暮らし』の編集方針に共感。発行元のルーツブックスに対し、安定的に制作できる体制構築を支援したいと申し出た。これを受け、「株式会社瀬戸内人（せとうちびと）」が設立、新たな体制での制作がスタートする。16号からは発行元が「株式会社瀬戸内人」となった。

「安定的に制作できるようになったのは、本当にありがたいことでした」と山本さん。「また別のかたちでの支援もありました。香川県の建設会社である菅（すが）組さんが毎号一定部数買い上げては県内のカフェや美容院、銀行、病院などに配布してくださっていました。それは今でも続いているんです」

一般的に、スポンサー企業がつくと、記事内容もその影響を大きく受けることがある。だが「そういうことは一切ありません」と山本さん。たとえば、オリーブ加工に関する同業他社を記事で取り上げることにも、とくに差し障りないそうだ。しかも、小豆島ヘルシーランドが運営する通信販売の顧客向けにも『せとうち暮らし』が配布されることになり、それまで、2000部ほどだった発行部数は約2万部までに急増（現在は1万部前後）。定期刊行物としてコンスタントに発行できる体制が整った。

そんななか、2017年に『せとうち暮らし』は『せとうちスタイル』とタイトルを変え、リニューアル創刊するという大きな変化を遂げた。判型はB5判の平綴じに。発行は年4回。誌面デザインも刷新した。ちなみに、山本さんの編集長就任はこれより少し前、『せとうち暮らし』20号（2016年）から。

●『せとうちスタイル』編集長・山本政子さん

「瀬戸内に暮らす人々に焦点を当てながら、ここでの暮らしやその魅力をお伝えするという方針は変わっていません。ただ、もっとシンプルに、私たちの暮らす瀬戸内の魅力を伝えることができるんじゃないかと考えるようになったんです」

身近に海があり、その先に島々を見渡す穏やかな風景が広がる。船は日常的な交通手段で通勤・通学に利用している人も多い。ごく当たり前の暮らしのなかに、瀬戸内ならではの幸せがある。そんなライフスタイルを誇ってもいいのではないか。リニューアルには、そのような想いが込められている。

「従来はデザインも地元のデザイナーさんにお願いしていたのですが、『スタイル』からは東京のプロダクションに変えました。面白いもので、素敵だなと思って選ぶ写真が私とは違う。でも、それは私たちが当たり前に思っていたから選ばなかっただけで、客観的に見ればとても素直に瀬戸内の良さを表現している写真でした。瀬戸内から少し離れた場所に暮らしている人たちの目を入れたことで、私たちも改めて、瀬戸内の魅力を捉え直すことができたんです」

そうして順調に『せとうちスタイル』は丸3年、12号まで発行されてきた。ところが12号の制作中、世界的なコロナ禍に見舞われる。瀬戸内の島々には、島民が数名、病院や診療所がないところも多い。そんな島々に、取材だからといって部外者が立ち入ることはできない。山本さんは、じつは少し前から考えてきた「年4回の発行は、瀬戸内の暮らしのペースに合わないのではないか」という思いを、実行に移すことにした。

「私たちは、一つの島に何度も通い、島の方々とも何回もお会いしてお話をうかがい、何年もかけて信頼関係を築きながら記事をつくってきました。それは地元でつくる地域雑誌だからこそできることです。ただ年4回というペースは、そのためには少し速過ぎる。もっと、瀬戸内の日々のペースに落としたいと思っていたんです。そんなところにコロナ禍が来ました。現実的に取材が難しくなりますし、ここでペースを落として、1年に1冊にしようと決めました」

2021年4月に発行されたvol.13の特集テーマは「生きる場所、暮らす場所」。瀬戸内で活動する人に焦点を当て、その仕事や人となり、交友関係までを丁寧に綴ったものとなった。また「Special Photo Gallery」として、瀬戸内をフィールドとする5名の写真家によるグラビアページを構成。コロナ禍の折り、撮り下ろしは難しくても、彼らの手持ち写真を使用しながら、瀬戸内の風を、全国の読者に届けたいと考えてのことだ。

『せとうちスタイル』は、これまで幾多の変化を繰り返しながらも、継続して発行されてきた稀有な地域雑誌だ。今年、また新たな一歩を踏み出した『せとうちスタイル』はこれからも、島々をわたる爽やかな風を、全国に運んでくれるだろう。

●毎号『せとうちスタイル』の1ページ目に掲載されている小豆島ヘルシーランドのタイアップ広告（photo:坂本政十賜）

●vol.13の特集テーマ「生きる場所、暮らす場所。」では瀬戸内で活動する人に焦点をあてた（photo:坂本政十賜）

●2017年発行のvol.3の特集テーマは「おいしいのそばには、すてきな風景がある。」。広島県豊島（とよしま）では、漁師になるために島に移住したご夫婦を取材、太刀魚漁にも同行したそうだ

●『せとうちスタイル』バックナンバー。最新号のvol.13表紙には、瀬戸内海の写真に広島在住の画家nakabanのアートワークが重ねられている

●山本さんがいとおしく感じている瀬戸内の風景。「海があって、島がある。そして、島々には大切な人たちがいます」と山本さん

●商業雑誌として生まれ変わった『せとうち暮らし』。2015年発行のvol.16からは発行元の変更に伴いロゴなどを変更した

●香川県の事業として誕生した『せとうち暮らし』

Let's Greening! 緑のまちづくり

一般財団法人第一生命財団と公益財団法人都市緑化機構が共催する「緑の環境プラン大賞」は、生活の質の向上、コミュニティの醸成などに役立つ、緑豊かな都市環境の形成を目指す緑化プランに対し、助成を行う事業だ。2020年度には「シンボル・ガーデン部門」「ポケット・ガーデン部門」の2部門に対し、国土交通大臣賞2件、緑化大賞3件、コミュニティ大賞10件が選出された。今回は、2019年度に「おもてなしの庭」大賞に選出された緑化プランを訪ね、整備の状況について伺った。

取材・文:**佐藤真** photo:**坂本政十賜**

匠の庭師が日本庭園文化を世界に発信

港区芝公園

2015年度から2020年に向けた期間限定のプログラムとして始まった、花と緑で観光客をお迎えする特別企画「おもてなしの庭」。その最後の受賞となったのが、一般社団法人日本造園組合連合会による、「逍遥の庭」と「はなやぎの庭」だ。場所は港区芝公園内の都立芝公園の一角。日比谷通りを挟んだ向かいには増上寺が控える。

芝公園は、1973(明治6)年の太政官布達により、上野、浅草、深川、飛鳥山などと共に指定された日本で最初の公園の一つで、徳川家の菩提寺だった増上寺の境内が公園地になった。増上寺の三解脱門(さんげだつもん)の左右に松が植えられていたことから、当時は百本松原とも呼ばれていたという。その後の災変により松が消失・枯死したため、現在はクスノキ並木に変わっている。今回の「おもてなしの庭」プランでは、クスノキ並木をはじめとする周辺地域の景観との連続性が課題であった。

伝統をつなぎ、次代の伝統を創造する技

江戸時代の面影が残る芝公園に「日本の庭園文化」を発信する二つの庭園をつくるのが基本コンセプト。一つは、庭石や敷石の配石や竹垣、樹木植栽など日本庭園の伝統技法で庭づくりをする「逍遥の庭」。もう一つは、伝統をつなぎつつ、次代の庭園を創造する技を見せる庭で、創作竹垣、和モダンのつくばい、飛石を紹介する「はなやぎの庭」。二つの庭は、門を境に向き合うように配置された。

風光明媚な場所を辿る東海道の旅を想起させながら日本橋方向へ広がるのが「逍遥の庭」。「江戸の庭とまち」がテーマだ。

「品川から高輪あたりの海をイメージしてもらいたくて敷石を市松模様の庭にした」と語るのは庭師・野村脩さん。富士山がつくられ、富士山の絞れ水が流れてくるイメージを石で表現した。面白いのは、覗き窓のある竹のオブジェが置かれていること。覗き窓は三つあり、上は大人用で富士山、中は車イス用でカニ、下は子ども用で花が見える仕掛けになっている。遊びごころを忘れないのも江戸文化の特徴だ。

日本庭園を世界の文化遺産に

「はなやぎの庭」は、増上寺の三解脱門の威容を眺めつつ品川方向へ広がる庭。「令和の和モダンのまちのにわ」がテーマで、庭師たちが作庭のプロセスをパフォーマンスする空間になっている。

まず驚かされるのは、その巨大な竹垣だろう。「臥龍垣(がりゅうがき)と名付けたオリジナルで、あえて乱れ格子にした」と言うのは、日本造園組合連合会相談役荻原博行さん。龍の背中を模しているそうで、土のなかから今にも龍が飛び出してくるような躍動感がある。ここにはもう一つオリジナルの疾風垣(はやてがき)もつくられた。同じ乱れ格子だが、臥龍垣のような猛々しさはなく、さわやかな風が吹き込むようなやさしい竹垣だ。他にも、石を刻む野面積(のづらづみ)、用と景の美をつくる飛石、手水鉢と配石のアレンジが際立つ蹲踞などが披露されている。

日本庭園の技法を使って庭づくりをすると自然に日本庭園になってしまう。日本庭園の風情が生まれてしまうというのだ。「日本庭園の技法をユネスコの世界文化遺産にしようと目論んでいるのですが、そのきっかけになればいいなと思っています」と荻原さん。

庭は昔から接待の場、すなわちおもてなしの場所だった。今回の庭は和の庭園文化、日本の庭づくりを通して、おもてなしの心遣いを世界に発信できる庭となったと確信した。

●新たな景色が展開する結界としての門。新時代の技と歴史文化の技を空間の結界として扱い、既存の門の改修を行った

●期間限定でつくられた竹の技の結晶「竹花火」

上●市松模様の敷石と金閣寺垣が絶妙なハーモニーを醸し出す。中央右に見えるのが竹のオブジェ
右●天の川をイメージさせる月の庭。ここが番所の跡地であることを示す井戸があしらわれた

上●門を抜けるとまず瓦縁石が客人を迎え入れる。その奥に疾風垣が見える
右●波を打ちながら流れる「臥龍垣」。その一番低い垣の後ろに東京タワーがそびえ立つ

●正面左から庭づくりを行った寺下弘さん、日本造園組合連合会相談役荻原博行さん、同じく庭づくりを行った野村脩さん

連載 第23回

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

一般財団法人第一生命財団による「待機児童対策・保育所等助成事業」は、2021年度で第9回目を数える。新設の保育所および認定こども園に対し、保育の質向上に役立つ遊具、絵本などの拡充を目的とした助成を行っている。そこで今回は、園舎新設当時から計画していた室内での大型遊具を、助成を活用することでようやく実現させた、埼玉県川口市の保育園を訪ねた。

取材・文:**斎藤夕子** photo:**坂本政十賜**

埼玉県川口市 鳩ヶ谷キッズランド
ふわっと夢空間「陽彩ブリッジ」

1年がかりで計画を実現

埼玉高速鉄道の鳩ヶ谷駅に隣接する土地に2020年4月、社会福祉法人陽彩こころの会が運営する認可保育園「鳩ヶ谷キッズランド」が開園した。2001年に開業した埼玉高速鉄道は東京メトロ南北線とも直通運行し、都心へのアクセスが良い。開通以来周辺の宅地化が進んでいる。そんな土地柄で、駅に隣接する保育園の存在は、共働きの子育て世代にとって頼もしい。定員は90名。保護者の育児休暇明けからの利用ニーズに対応し、1歳から就学前までの子どもたちが通っている。

「都市的な立地のため園庭はさほど広くありません。また、大きな公園があまり近くにないため、子どもたちが十分にからだを動かして遊ぶ環境の確保が課題でした」。そう教えてくれるのは森寺恵理施設長だ。「そこで園舎新設時から、広さと天井高がある開放的な部屋を設置し、ここに、天井から吊るして空中に張り巡らせるネット遊具の設置を計画していたんです」。

現在、3～5歳児が一緒に過ごしているというその部屋の広さは約99.2㎡、天井高は約4m。ネット遊具は建物への後付けができないため、この部屋の天井には、建築時にネット遊具設置のための基盤的な工事を施していた。ただ、施設に合わせて一からつくる特注品であるだけに、費用もそれなりにかさむ。開園時にはすべてを整備する余裕がなく、1年目は遊具がないままの状態になってしまった。

「それが、この度の助成が2020年11月に決まり、そこから、どうしても新年度に間に合わせたいと、事業者の方には大変、無理をお願いしました」と森寺施設長。ちなみに、助成で賄えたのは全体の費用の一部だ。

●3～5歳児が一緒に過ごす、広い部屋に設置されたネット遊具「陽彩ブリッジ」

●ネットの素材は魚網で、耐久性の高い特注品だ

左から●奥の、筒状のネットでつながっているのがロフト状の小部屋「雲」
●みんなで天井近くまでよじ上って空中散歩
●「雲」と呼ばれるロフト状の小部屋も子どもたちには大人気
●昇降用ネットの「虹」を上って「橋」の中へ

遊びを通して心身を育てる大きなゆりかご

子どもたちの楽しげな声が聞こえる部屋に入ると、壁に沿った高さ2mほどの位置に、そのネット遊具が設置されていた。幅は約10mというなかなかのボリューム感。「陽彩ブリッジ」と名付けられたネット遊具は、部屋の隅に設けられた、梯子で上る小部屋を「雲」、メインのハンモック状のネットを「橋」、筒状の昇降用ネットを「虹」とする3部構成で、「橋」の中には大人の先生が1名と、20名ほどの子どもたちが入っていた。子どもたちはそのなかで、器用に手指と爪先をかけてネットを上ったり、滑り降りたり、寝そべったり、揺らしたりと、思いおもいに遊んでいる。そんな様子を見上げていると、天井近くまで上った男の子が「ヤッホー!」と手を振り、声をかけてくれた。怖くないかとたずねると、不敵に笑って、今度は横へと移動していく。

このようにダイナミックな遊びを展開するのは、この部屋で過ごす3～5歳児が中心だが、1、2歳児もネットに上げてもらい、ブランコのように揺れる空中体験を楽しんでいるという。

「設置してからまだ2カ月ほど。最初の1カ月間は安全面に配慮してかなり慎重に見守ってきましたが、子どもたちの成長は想像以上。自分の力に応じてトライしています」と森寺施設長。トランポリンのように不安定な足場でバランスをとり、全身の筋肉を鍛えることができるネット遊具での遊びは、子どもたちの体幹を鍛えてくれる。体幹が鍛えられることで脳の成長も促され、言語の発達にも影響があるそうだ。さらに森寺施設長は「ネット遊びが上手な子が、まだ不安に思っている子のフォローをしたり、上り下りに時間がかかってもゆっくり待っているなど、思いやりの気持ちや社会性も身に付いているようです」とも教えてくれる。また、ネット上でアクティブに遊ぶだけではなく、「雲」と称する小部屋で静かに過ごせることも、子どもたちの安心感につながり、遊びの幅を広げているそうだ。

この日は、ネット遊具の製造販売会社である株式会社岡部からもスタッフが来園し、子どもたちが遊ぶ様子を見学していた。鳩ヶ谷キッズランドへの施工は、スケジュールのタイトさだけでなく、子どもたちのために良い遊具を提供したいという理事長、施設長以下職員みんなの熱意を感じ「今までのどの現場よりも印象深い」と語っていた。

「ふわっと夢空間」とキャッチフレーズがつけられたネット遊具は、子どもたちをゆったりと大きく包み込み、健やかで逞しい心身を育む揺りかごのようだ。ネット遊具は園舎の新設時から計画し、さまざまな条件をクリアしなければ、なかなか導入できない大型遊具だ。それだけに、これを実現させたというプロセスすべてが、子どもたちの成長を第一に考えた保育環境であることを証しているだろう。

左●遊びの時間が終わると「虹」をたくし上げて収納
上●森寺恵理施設長（右から2番目）と保育園役員の有泉功さん（右端）。左3名はネット遊具を設置した株式会社岡部のスタッフ

噂の「駅前」探検

第10回桜木町駅

今尾恵介

いまお・けいすけ●1959年横浜市生まれ。フリーライター。旅行ガイドブック、地図・旅行関係の雑誌や地図・鉄道関係の書籍の執筆を精力的に手がける。（一財）日本地図センター客員研究員、（一財）地図情報センター評議員など。著書に『駅名学入門』（中央公論新社、2020）、『地図帳の深読み』（帝国書院、2019）、『不思議地名巡り』（ちくま文庫、2020）他多数。

イラストマップ：小夜小町

2021年の春JR桜木町駅前と新港地区の運河パークを結ぶ都市型ロープウェイYOKOHAMA AIR CABINが開通した。全長630m、所要時間約5分の空の旅だが、視界360度でみなとみらいを一望できると好評だ。JR桜木町駅は、1872年日本で最初に鉄道が開通した時に初代の横浜駅として開業した。その後東海道本線の延伸にともない、1915年に「桜木町」に改称された。また2004年まで、東急東横線が乗り入れていたが、みなとみらい線の開業にともない廃止。現在は、JR京浜東北線（根岸線）と横浜市営地下鉄ブルーラインが乗り入れている。港に広がる「みなとみらい」は、横浜赤レンガ倉庫や横浜ハンマーヘッドなどの大型商業施設が並ぶ横浜有数のエンタメエリア。桜木町駅は、みなとみらい駅、馬車道駅（ともに横浜高速鉄道みなとみらい線）と並ぶ「みなとみらい」の拠点駅にもなっている。

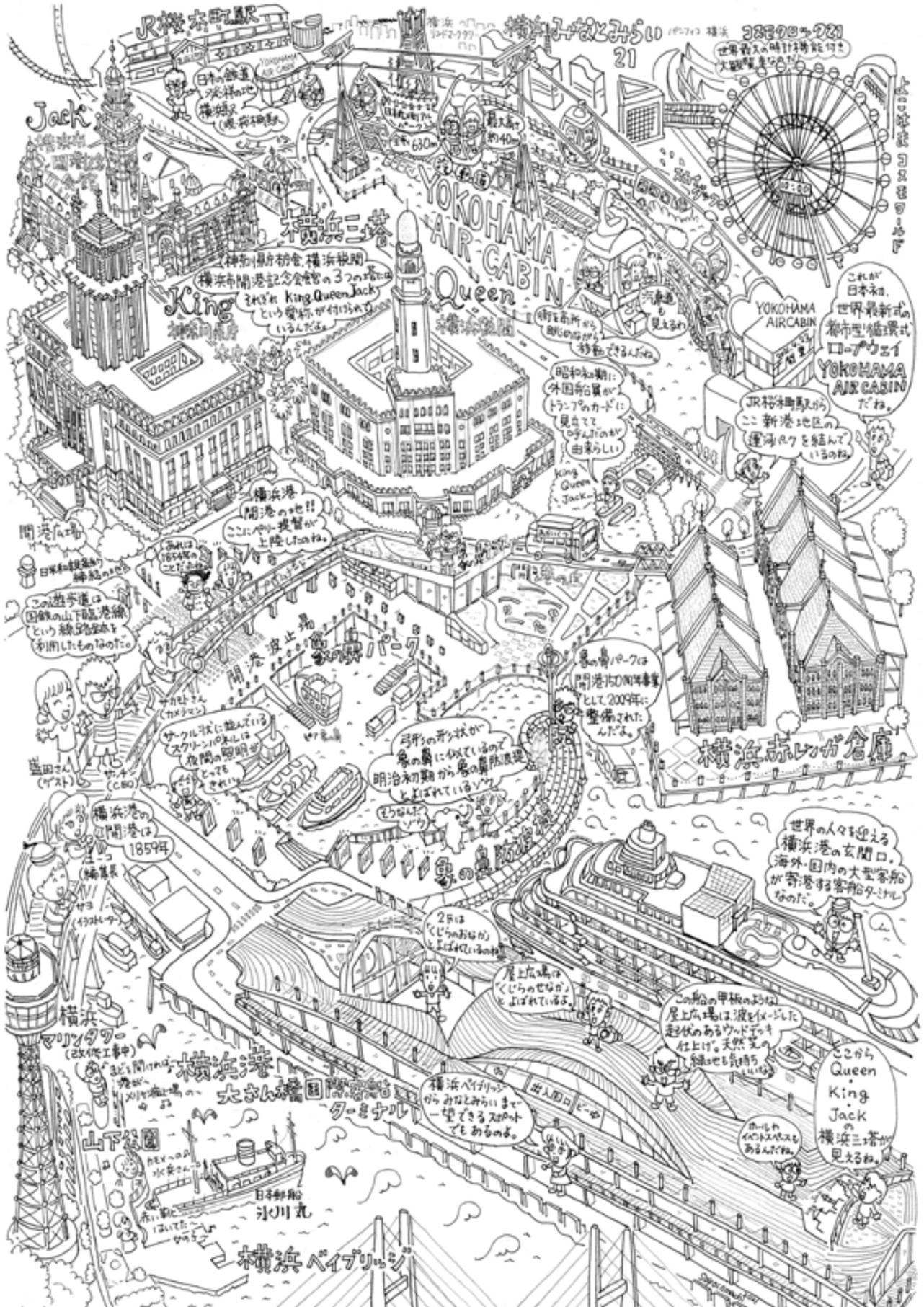
旧暦明治5年9月12日、新橋と横浜の間に日本で初めての鉄道が開通した。翌6年から採用された新暦に直せば同年（1872）10月14日になるのだが、これが「鉄道の日」に定められ、その後もさまざまな鉄道関連イベントが行われるようになった。ただしこの日に行われたのは厳密に言えば「開業式」で、明治天皇をはじめ英米仏蘭独の外国公使や政府の重臣などが出席した。この時に特別列車が新橋～横浜間を往復したが、一般営業は休止されている。

同日の詳細を記した国立公文書館所蔵の「鉄道開業式伺」は同館のサイトで原文を閲覧できるが、新橋からの列車が横浜に到着したことを「第十一字横浜鉄道館へ着御」と記した。11時着であるが、しばらくの間「時」ではなく「字」が用いられたのは、江戸時代の「時」との混同を避けたためだろうか。停車場もこの時には「横浜鉄道館」と呼んでおり、どこか特別感が漂っている。駅という施設の最初の呼び名は「鉄道館」だったのである。ちなみに現在は当たり前に使っている「駅」の字も、明治になるまで宿場の意味で日常的に用いており、それが鉄道停車場の意味で定着するのは、鉄道旅行が一般化した明治末から大正の終盤あたりにかけてであった。

この文書によれば、開業記念の列車がその横浜鉄道館に着いた際には東京鎮台（第一師団の前身）による祝砲が101発、港に碇泊していた軍艦から同じく21発が打ち上げられ、「慶雲楽」が奏せられたという。その後、明治天皇から次のような勅語が発せられた（原文に適宜句読点を追加。〔　〕内は現代語）。

今般我国鉄道ノ首線工竣ルヲ告ク。朕親ラ開行シ、其便利ヲ欣フ。嗚呼汝百官此盛業ヲ百事維新ノ初ニ起シ、此鴻利〔大きな利益〕ヲ万民永享ノ後ニ恵ントス共、励精勉力実ニ嘉尚〔ほめたたえる〕スヘシ。朕我国ノ富盛ヲ期シ、百官万民ノ為メニ之ヲ祝ス。朕更ニ此業ヲ拡張シ、此線ヲシテ全国ニ蔓布〔広める〕セシメンコトヲ庶幾ス〔こいねがう〕。

天皇に「蔓布セシメン」と宣言させていることから、当初は新政府の一部で懐疑的な意見もあった全国への鉄道網拡充政策を鮮明にしたことになる。



ところがその後は西南戦争などで国庫が乏しくなり、結局はその鉄道建設促進の国策も民間資本によって進めざるを得なくなったのだが、それはもう少し先の話である。

その勅語が発せられた「横浜鉄道館」が現在の桜木町駅である。今でこそ京浜東北線（根岸線）や横浜線からの直通電車が往来する途中駅に過ぎないが、明治22（1889）年に官営東海道鉄道（現東海道本線）が全通した時代を経て、2代目横浜駅が大正4（1915）年8月15日に高島町付近に新設されるまでは横浜の玄関口をつとめていた。ついでながら、関内や山手方面に根岸線が延伸されるのは戦後の昭和39（1964）年と比較的新しい。

先ほど一般営業が「休止」されたと書いたのは、それ以前から旅客列車が品川～横浜間を仮開業で1日2往復運転されていたからだ。途中はノンストップだったから、厳密な意味で日本初の駅は品川と横浜（現桜木町）の2駅のみである。仮開業ダイヤでの横浜発時刻は「午前八字」と「午後四字」で、品川駅到着は35分後だから平均時速は40.6kmと意外に速い。ちなみに新橋～桜木町間を現在の京浜東北線の電車で乗り通すと31～32分かかる。今は途中駅が多数あるので単純比較はできないが。

新橋～横浜間が開通した時点で、実は東京～大阪間の鉄道がどこを経由するか決まってはいなかった。一旦は英国人技師ボイルのアドバイスで明治9（1876）年に中仙（山）道経由に決まるのだが、その理由は「本州のまん中に幹線を通し、後で両側へ支線を伸ばせば手っ取り早く鉄道網が出来上がる」といった、いかにも低地の多いイングランドらしい発想であった。しかし実際にルートを精査してみると険しい山道に沿って鉄道を敷くのはとても無理なことが判明、東海道ルートに変更されている。

横浜から静岡、名古屋方面への敷設が決まったのはいいが、横浜停車場は市街地のある南東側を向いていて、程ヶ谷（後の保土ケ谷）や藤沢方面へ敷設するには向きが違いすぎる。結局はすべての列車が方向転換して一旦新橋方面へ戻り、途中で西へ分岐して程ヶ谷へ向かうルートとなったのである。しかし新橋から大阪方面への全列車を方向転換するのも面倒で、日清戦争の時に横浜を通らずに神奈川と程ヶ谷を直結する短絡線を建設した。これが現在の東海道本線である。

その後は旅客・貨物ともに輸送量も激増し、のんびりと横浜停車場でスイッチバックなどしている場合ではなくなり、第一次世界大戦が始まった翌年の大正4（1915）年に現在の市営地下鉄高島町駅のある付近に2代目横浜駅が完成する。しかし不運にも同12年の関東大震災で焼失、さらに貨客の激増という背景もあり、3代目の現横浜駅を昭和3（1928）年10月15日に開業した。初代横浜駅が桜木町と改称したのは2代目ができた大正4（1915）年8月15日のことなので、桜木町駅の名前になってからもすでに100年を超えている。ついでながら桜木町という町名が誕生したのも鉄道開業と同じ明治5（1872）年であった。

長距離列車の運転はその時に横浜駅に譲り、桜木町駅は国鉄京浜線（現JR京浜東北線）の終点として戦後まで活躍する。現横浜駅に国鉄より5か月ほど前の昭和3（1928）年5月18日に電車を乗り入れさせた東京横浜電鉄（現東急東横線）はその後、本横浜駅（後の高島町）まで同年8月3日に延伸、さらに7年3月31日には桜木町まで延伸した。横浜～桜木町間を高架線で両者がぴったり併走する姿は平成16（2004）年1月30日まで72年間に及び、その2日後には東横線が「みなとみらい線」へ直通する現ルートに変更されて桜木町から姿を消している。

桜木町駅前には初代横浜駅の頃から市電（当初は横浜電気鉄道）が乗り入れていたが、戦後の高度成長期になると自動車の激増に押されて昭和47（1972）年4月1日に全廃された。そして同年末から走り始めたのが横浜市営地下鉄である。同51年には伊勢佐木長者町～横浜駅間が延伸されたが、この時に横浜～桜木町間には国鉄・東急・地下鉄の3社が並行する全国的にも珍しい区間が誕生している。

桜木町駅といえば、私が小中学生だった昭和40年代には目の前の大岡川には小船が連なり、浜側にはクレーンが林立し、ドックや倉庫の並ぶ港町らしいイメージであったが、その後の変貌は著しい。かつて臨港貨物線が通っていた上空には令和3（2021）年4月22日からYOKOHAMA AIR CABINという名のロープウェイ（桜木町～運河パーク間0.6km）も開通、新しい港湾地区を俯瞰する都市型索道（さくどう）として注目を集めている。いつの間にか横浜市役所も大岡川のすぐ対岸に移転してきた。これからも変化し続けるだろうか。

JR桜木町駅前と新港地区・運河パークを結ぶロープウェイ「YOKOHAMA AIR CABIN」photo:**坂本政十賜**

back number

今号と関連する特集号をPick Up
（その他は特集タイトルのみ）

No.1 特集「都市の幹線道路」 (1984.2) **在庫切れ**
No.2 特集「都市公園」 (1984.5) **在庫切れ**
No.3 特集「都市と河川」 (1984.12)
No.4 特集「子どものための都市計画」 (1985.6) **在庫切れ**
No.5 特集「都市と盛り場」 (1985.12)
No.6 特集「都市生活と神社仏閣」 (1986.5)
No.7 特集「住宅地の道路と家並み」 (1986.9)
No.8 特集「都市とヒューマンスケール」 (1987.3)
No.9 特集「都市と水辺」 (1987.7) **在庫切れ**
No.10 特集「都市の景観」 (1987.12) **在庫切れ**
No.11 特集「都市と防火」 (1988.7) **在庫切れ**
No.12 特集「都市とアメニティ」 (1988.12) **在庫切れ**
No.13 特集「都市と運河」 (1989.8)
No.14 特集「都市再開発とアーバンデザイン」 (1989.12)
No.15 特集「アミューズメントと都市」 (1990.3)
No.16 特集「高齢化社会と都市」 (1990.6) **在庫切れ**
No.17 特集「私鉄と歩んだ都市」 (1990.9)
No.18 特集「都市とホール」 (1990.12)
No.19 特集「エコロジー都市」 (1991.3)
No.20 特集「新・集合住宅論」 (1991.6)
No.21 特集「新・リゾート論」 (1991.9)
No.22 特集「都市と商業空間」 (1991.12)
No.23 特集「都市の民俗誌」 (1992.3)
No.24 特集「都市と緑化」 (1992.6)
No.25 特集「公共建築のデザイン」 (1992.9)
No.26 特集「都市と高層ビル」 (1992.12)
No.27 特集「住宅の間取り」 (1993.3)
No.28 特集「都市と広告」 (1993.6)
No.29 特集「都市の上水道」 (1993.9)
No.30 特集「都市の保存」 (1993.12)
No.31 特集「ミュージアムと都市」 (1994.3)
No.32 特集「プレハブ住宅」 (1994.6)
No.33 特集「都市の色彩」 (1994.9)
No.34 特集「観光都市の条件」 (1994.12)
No.35 特集「都市と下水道」 (1995.3)
No.36 特集「マンションのメンテナンス」 (1995.6)
No.37 特集「都市と歩道空間」 (1995.9)
No.38 特集「ゴミとリサイクル」 (1995.12)
No.39 特集「住宅の水まわり」 (1996.3)
No.40 特集「都市の駐車空間」 (1996.6)
No.41 特集「橋のデザイン」 (1996.9)
No.42 特集「建築と木材」 (1996.12)
No.43 特集「輸入住宅」 (1997.3)
No.44 特集「都市と学校」 (1997.6)
No.45 特集「環境共生型まちづくり」 (1997.9)
No.46 特集「都市と情報化」 (1997.12)
No.47 特集「老いない住宅」 (1998.3)
No.48 特集「都市と駅舎」 (1998.6)
No.49 特集「住宅のコスト」 (1998.9)
No.50 特集「路面電車ルネサンス」 (1998.12)
No.51 特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう—集客都市へ」 (1999.3)
No.52 特集「シルバー・ハウジング」 (1999.6)
No.53 特集「NPOとまちづくり」 (1999.9)
No.54 特集「地域のノード、公共施設の新潮流」 (1999.12)
No.55 特集「都市公園の未来」 (2000.3)
No.56 特集「まちづくりの新しいパラダイム」 (2000.6)
No.57 特集「島のまちづくりに学ぶ｜沖縄編」 (2000.9)
No.58 特集「地域に開く大学」 (2000.12)
No.59 特集「危機管理のまちづくり」 (2001.3)
No.60 特集「保存—都市と建築、過去と未来をつなぐもの」 (2001.6)
No.61 特集「30代建築家の都市イメージ」 (2001.9)
No.62 特集「使う建築、使うまち—都市のストック活用法｜国内編」 (2001.12)
No.63 特集「LETS的まちづくり」 (2002.3)
No.64 特集「『都心居住』のまちづくり」 (2002.6)
No.65 特集「都市はアートで刺激される」 (2002.9)
No.66 特集「ランドスケープ・デザインの新展開—地形を活かしたまちづくり」 (2002.12)
No.67 特集「スローライフとまちづくり」 (2003.3)
No.68 特集「サステナブルな都市“成長”政策—都市計画と長期ビジョン」 (2003.6)
No.69 特集「吉祥寺—住みたい町ナンバー1の理由」 (2003.9)
No.70 特集「緑の建物づくり」 (2003.12)
No.71 特集「都市と観光、新たな視点」 (2004.3)
No.72 特集「構造改革特区とまちづくり」 (2004.6)
No.73 特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」(2004.9)
No.74 特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市［論］の現在」 (2004.12)
No.75 特集「マルチモーダルが都市を楽しくする［ヨーロッパ編］」(2005.3)
No.76 特集「路地・横丁空間からの都市再生」 (2005.6)
No.77 特集「公共空間、新たな視点」 (2005.9)
No.78 特集「小さな町の豊かな暮らし」 (2005.12)
No.79 特集「都市の「良質な」居住環境」 (2006.3)
No.80 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ—❶」 (2006.6)

- 長崎県佐世保市—人との交流と、そこで生まれる「感動」が町を変える／ソウルフード—佐世保バーガー
- 福岡県久留米市—「モノ」ではなく、「時間」を楽しむ商店街に／ソウルフード—焼き鳥
- 香川県高松市—自分たちの手で新しいやり方で、町を活性化する／ソウルフード—さぬきうどん
- 千葉県佐原市（現・香取市）—時計の針を100年前に巻き戻し、活性化した町／ソウルフード—いかだ焼き
- 長野県長野市—「ハレ」の気分を楽しめる、華やかな中心市街地の創造／ソウルフード—おやき
- 福島県会津若松市—埋もれた伝統を掘り起こし活性化の資源に／ソウルフード—ソースカツ丼

No.81 特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」 (2006.9)
No.82 特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」 (2006.12)

- 新潟県村上市—市民、商店、行政が一体となった活動で、町への愛着と誇りを育む｜風土’s foods—村上の「鮭」と「酒」のマリアージュを堪能する
- 山形県金山町—「街並みづくり100年運動」で林業の振興と新たな観光の姿を打ち出す｜風土’s foods—金山といえばラーメン!?
- 秋田県仙北市—今あるものをそのまま活かす観光で、スローライフなまちづくり｜風土’s foods—秋田、地のものを喰らう
- エッセイ｜「秋田」には海がない—角館・西木村調査の10年を振り返って｜秋山綾

No.83 特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」 (2007.3) **重版**
No.84 特集「サイクリング・シティの可能性」 (2007.6)
No.85 特集「地図とまち—見る・歩く・つくる」 (2007.9)
No.86 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ—❷」 (2007.12)

- 青森県弘前市—「洋館とフランス料理の街」のまちづくり｜風土’s foods—フランス料理で知る弘前の「風土」
- 群馬県桐生市—近代化遺産の「再発見」で、他のどこにもないまちづくりを｜風土’s foods—うどんは働くお母さんのファストフードだった?
- 富山県富山市八尾町—培われてきた文化を受け継ぐために、町全体を美術館にする試み｜風土’s foods—田舎風と京風が共存するところ
- 付録｜弘前・桐生・越中八尾のお散歩マップ&ブック

No.87 特集「「美味し国」の景観論—フランス、都市景観の新たな創造」 (2008.3)
No.88 特集「美味しいまちづくり」 (2008.6)
No.89 特集「都市を愉しむいくつかの方法」 (2008.9)
No.90 特集「シュリンキング・シティ—縮小する都市の新たなイメージ」 (2008.12)
No.91 特集「都市彩譜—まちのいろどりのふ」 (2009.3)
No.92 特集「fun town—たのしい・かわいい・やさしいまちづくり」(2009.6)
No.93 特集「マチとムラの幸福のレシピ」 (2009.9)
No.94 特集「創造のまちづくり」 (2009.12)
No.95 特集「団地ルネッサンス」 (2010.3)
No.96 特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」 (2010.6)
No.97 特集「新しい公共交通〜生活支援ネットワークへ〜」 (2010.9)
No.98 特集「下北沢から「都市」を考える」 (2010.12) **在庫切れ**
No.99 特集「「学校」からのまちづくり」 (2011.3)
No.100 特集「21世紀のまちづくり「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」」 (2011.6)
No.101 特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい—再生・復興への視点」 (2011.9)
No.102 特集「交流住宅—新しい暮らしのかたち」 (2011.12)
No.103 特集「時間に暮らす」 (2012.3)
No.104 特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」 (2012.6)

- 長野県飯田市｜市民ファンドで、エネルギーを「創造」する｜太陽光発電を中心に「エネルギーの地産地消」を目指す
- 栃木県那須塩原市｜農業用水路を使った「小水力発電」｜水を長年管理してきた経験を踏まえ、エネルギーを効率よく生み出す
- 長崎県雲仙市・小浜温泉｜資源豊富な地熱エネルギーで、温泉街の復活を目指す｜未利用温泉熱を利用した小規模バイナリー発電とまちづくり
- 震災復興Report2｜住民のコミュニケーションを原動力とした集団高台移転｜宮城県気仙沼市本吉町小泉地区
- 都市を拓いた人々48豊岡｜中江種造｜郷土に上水道をもたらした鉱山王
- 私の好きなまち・くらし3｜柳橋花柳界の原風景｜陣内秀信

No.105 特集「「町おこし」新潮流— 地域に埋もれたコンテンツを発信する」 (2012.9)
No.106 特集「子どもの空間とまちづくり」 (2012.12) **在庫切れ**
No.107 特集「シティホール—市庁舎の新潮流」 (2013.3)
No.108 特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」 (2013.7)
No.109 特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」 (2013.11)
No.110 特集「都市とサイン」 (2014.3)
No.111 特集「自由が丘—暮らしやすさの秘密を探る」 (2014.7)
No.112 特集「新しいパートナーシップ—PPP＞PFI＞コンセッション方式」 (2014.11)
No.113 特集「新しい図書館」 (2015.3)
No.114 特集「空き家—家と暮らしと地域のこれから」 (2015.7)
No.115 特集「酒とまちづくり」 (2015.11)
No.116 特集「ロスト近代と都市の未来」 (2016.3)
No.117 特集「建築とまちづくり」 (2016.7)
No.118 特集「空き地カルチャー 多孔質都市の可能性」 (2016.11)
No.119 特集「〈ゲストハウス〉的まちづくり」 (2017.3)

- ルポ｜「ゲストハウス」は町に効く
- ケーススタディ｜地域とつながる「ゲストハウス」｜Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE／YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE／ 亀 時 間 ／guest house MARUYA
- ルポ｜連携する地域と宿—アルベルゴ・ディッフーゾの可能性
- 連載｜スキマファイル・10｜蒲田・鶴見、昭和の秘境駅。
- 連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・10｜認定みどりこども園／湘南まるめろ保育園

No.120 特集「ライフスタイルとしての「防災」」 (2017.8)
No.121 特集「夕方からのまちづくり」 (2017.12)
No.122 特集「これからの住まい・くらし—やわらかい都市へ」 (2018.4)
No.123 特集「みんなでつくり、みんなでつかう」 (2018.8)

- 鼎談｜「みんなの家」と公共性｜伊東豊雄×齋藤純一×小泉秀樹
- ルポ｜人と町をつなぐ「みんなの家」
- ケーススタディ｜「みんなの」新しい場所｜ヨコハマ・アパートメント／31VENTURES KOIL（柏の葉オープンイノベーション・ラボ）／グリーン大通り・南池袋公園／MAD City／まちのこども園 代々木公園
- 連載｜Let’s Greening! 緑のまちづくり・1｜「もみじの庭」をお裾分けするポケット・ガーデン
- 連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・14｜ハピネス保育園
- 連載｜噂の「駅前」探検・1｜品川｜今尾恵介

No.124 特集「生まれ変わる街—渋谷・新宿・池袋」 (2018.12)
No.125 特集「オープンスペースからのまちづくり」 (2019.4)
No.126 特集「都市と木材」 (2019.8)
No.127 特集「カフェとまちづくり—心地よい空間と街並み」 (2019.12)
No.128 特集「クラウドファンディングで町を楽しく魅力的に」 (2020.4)
No.129 特集「都市の言説を巡る旅— 8のキーワードから探る都市［論］の現在2020」 (2020.8)
No.130 特集「コロナ後の都市と暮らし」 (2020.12)
No.131 特集「〈SDGs〉を考える—サステナブルな都市とは」 (2021.4)

- 対談｜「誰もが暮らしやすい都市」とは何か｜村上芽×大村謙二郎
- 連続インタビュー｜SDGs—環境・経済・社会｜1.循環型社会における「緑」の可能性｜横張真／2.持続可能な「成熟型まちづくり」への転換を目指す｜諸富徹／3.気候変動危機、私たちにできること〜SDGsの達成も視野に〜｜足立治郎／4.自治体SDGs、オルタナティブな未来への実践｜高木超／5.人間の集合としての都市、その未来への期待｜武田重昭／6.SDGsと資本主義の未来｜大澤真幸
- 連載｜Let’s Greening!緑のまちづくり・9｜地域の文化遺産の庭園を活用した交流と体験の広場
- 連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・22｜一麦保育園
- 連載｜噂の「駅前」探検・9｜渋谷駅｜今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜

財団が発行した調査研究報告書

当財団では助成した研究について、その成果である調査研究報告書を発行しています。
ここ1年間に発行したものをご紹介します。

東日本大震災で死亡した役場職員の災害検証と役場職員遺族の住生活と心の復興に関する研究
麦倉哲（岩手大学教育学部・教授）

大江戸-東京/都市街区幾何形状の歴史的進化に関する実証的研究―徳川期・寛文年間から令和に至る350年の街区変遷から読み取る災害インパクト―
谷本潤（九州大学大学院総合理工学研究院・教授）

住民投票の受容条件を探る―サーベイ実験によるアプローチ―　砂原庸介（神戸大学大学院法学研究科・教授）他

大規模災害時における保育施設の避難所活用から見た地域住民と保育施設の関わりに関する研究
藤井里咲（東京電機大学未来科学部・助教）

地方創生のための観光振興と観光公害―宿泊税導入を用いた分析―
鈴木崇文（愛知淑徳大学ビジネス学部・講師）他

集合住宅のHOAと自治体の「戦略的相互関係」によるまちづくりに関する日米比較研究：責任領域の交錯と共創の視点から
菊地端夫（明治大学経営学部・専任教授）

在日イスラム系外国人の避難所としてのモスクの利用可能性の検討
小谷仁務（東京大学大学院工学系研究科・助教）他

原発被災地域への移住者の住生活に関する研究　窪田亜矢（東京大学工学部・特任教授）

（刊行順。肩書は当時のもの。敬称略）

information

調査研究報告書をご希望の方には一部2,000円でお頒けしますので、当財団までご連絡願います。
過去の調査研究報告書についてはホームページ（次頁にアドレス）にテーマ、研究者名および要旨等を掲載しています。

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ　http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/

購読のご案内
年3回（4月・8月・12月）発行、頒価500円＋送料実費
定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧になり、ご希望の号をお求め願います。

city&life no.132 Aug.-Nov.2021
2021年8月発行

企画委員　日端康雄（慶應義塾大学名誉教授）
陣内秀信（法政大学特任教授）
大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
小泉秀樹（東京大学教授）
木下庸子（工学院大学教授・設計組織ADH代表）
盛田里香（第一生命財団常務理事）
佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）

編集・発行　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社アルシーヴ社
斎藤夕子

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社エイチケイグラフィックス
頒価500円＋送料実費

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life no.132 Aug.-Nov.2021